
シュセンド

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュセンド

【Nコード】

N1187I

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【SF/シリアスめ/全15話】 狙撃者はテレキネシス者。軌道を曲げて、弾丸は彼の意志通りに標的を貫く。犯行など予測不可能な闇のなかで、ひとりの少年が風に靡き都市を見下ろしている。無数の生活者が存在し、底に広がる風景は、上空を反映させた星図のようだ、光あるだけ生物がいる。「あれらを全て金にかえてやる」

……

さて、此処からひとりのシュセンドの話を始めよう。彼を救い出すのは、クオリアか、友か、それとも 『空想科学祭2009』 企

画参加作品。

シユセンド・1 (前書き)

内容に残酷描写がありますので、脆弱な方や苦手な方は読むのに
ご注意ください。

この話は地球語（日本対応）表記で書かれています。言うまでもな
く、フィクションです。

空想科学祭2009 参加作品。企画サイトは以下です。

<http://sfesta2009.konjiki.jp/>

シュセンド・1

宇宙で指名手配されている凶悪犯に懸けられた賞金は、安いものだった。たったの100万PYから1千万PY程度の金額だった。光の者は、闇の者にその程度でしかない規模の懸賞金を表明している。

だが、闇の市場では。

闇の者は光の者に、1億PYから1無量大数PYが相場の賞金を懸けているという。それによって、時の主導者や権力者が銃弾に倒れることなど闇では通例だった、さて……。

此処からひとりの、『シュセンド』の話を始めよう。

開発と発展途上の渦中に属する埋立型準惑星、アーノルド。そこでは、正規のアーノルド式オークションが行われていた。数百兆からなる取引が随時進行しており、アーノルド暦93年4月9日その日、大々的に注目されていた目玉商品は、マイドリアン公爵がかつて所有していたとされ、亡き後に年月を経て贖^{にせ}と紛うことなく出品された“クロースド・ジャー禁じられた壺”だった。時価は、過去100億PYまで上り詰めたことのある代物でもあった。

価格は正午の現在、すでに8千万PYの値がつき公開されていて、知る人札者は変えられず自動、与えられて希望または絶望へ、或いは手をつける者、考慮し離れていく者、傍観と洒落こみ成り行きを追う者などと、情状に合わせて左右されていき判断を下していった。オークション終了予定時刻の数時間前に、価格は沈黙したかのように止まっている。

約20万人が日平均で行き交うと言われる都市、商業集積地アツ

ラの、ビル壁面に設置されていた大型ビジョン（アツラビジョン）からダイレクトに発信されている情報を前に真也は、眩暈めまいを起こしていた。「あつい……」体から熱を発していた。

2・9ベクトル。真也のなかで、何かが傾きかけているらしい。合成樹脂でできた衣服は、腐食はしていないものの熱のせいで劣化が箇所で見られていた。袖ノースリーブなしで上は三重に、軍服色カーキのスラックスと合わせで着こなされた彼は手ぶらで雑踏を歩き、平面幾何学式に造設された民間庭園へとふらふらおほつか覚束ない足を運んでいた。

いくらまで釣り上がるのが競られようが、競売の結果に関してはこれといって然して興味はなく、それが彼のまだ未成熟である心身の成長過程を妨げるようなことは別がない、なかった。それより、大庭園、大公園をさ迷うように石舗装された道なりに沿って歩き、彼は対向してきていたひとりの少女と肩が激しくぶつかってしまったのだった。

「あ、ごめんなさい！」

腰のあたりにまで長い、金髪に近い、ゆるりと柔らかく揺れる髪の毛の持ち主でもある少女は、すぐに真也に謝っていた。だが、少女が手に束で持っていたと思われる紙の数十枚かは、空中で遊びのように舞ってしまっていた。ひら、ひら、ひらり……そよ風にも逆らわず、数枚は思わぬ所へと飛んで行ってしまいそうになった。

「きゃああ大変！」

少女が慌てて紙を追いかけていた、やはり髪を揺らしながらだった。シルクのような滑らかな艶の髪は、ひとつに束ねている。

真也は、無言で神経を集中させていた。「……」見えない何か、彼の元へと集まってきていた。エネルギーへと変換したそれは、目の前の対象物へと注がれていく、いや、対象物『たち』へと、向けられていた。

ピ、ズドン、ぱた。

もし関西人が此処にいて様子を音で表したなら、きっとそう表現するだろう、ばらばらに飛んで行きそうになった紙は意志を与えられたか、重力を与えられたのかに見えて、下へと急降下で落ちてしまっていた。全ての紙が一斉に揃って落ちたことにより、異様な光景となってしまうた。「何……」

時々、傍を通りかかった通行人が不思議そうな顔で過ぎ去っていた。

「今の、あなたがしたの？ ……驚いた」

少女はまだ、状況についていけずポカンと呆けて、彼の頭から足先までの全身を見つめていた。

「とにかく拾ったら……チラシ」

冷やすには2人に丁度よく、冷ややか、冷静な声が彼から浴びせられていた。「そ、そうね、えへへ」言葉の通りに少女は素早く、石並びの地面じゅうに散らばったままの紙を回収し始めた、真也も今度は『手を使って』拾い集めてあげていた。「ありがとう」紙を再び束に戻した後は、和やかに会話が始まっていった。

「びつくりした……凄かった。此処には、各地からイミン（移民ノ異民）が多くて色んな力を持った種が大勢いるけれど……あなたみたいにサイコを正確に出力できる者なんて、初めて見たわ、他には、どんなサイコを持ってらっしゃるの？」

まだ興奮が治まらないのか、少女は紙の束を胸に真也の顔色を観察していた。サイコ 『精神』という意味を持つ。だが少女は違って、今では能力者、「サイコキネシス」という意味合いで使っていたようだった。さいこきねしす、サイコキネシス。手などを使わずに物を意思で動かす念動力のことである。

真也は、「俺のはただのトリック程度だ、ただの……テレキネシ

ス。言葉の通り、「遠隔」「動作」させるだけ」と謙遜していた……が緊張していたのかどうかは判らないが、あまり気軽に話せやすそうなタイプではなかった。

付け加えて、「至近ならテレパスやテレポートも可能」だと彼は言っていた。

「ふうん……でも凄い、私にはできないや。せいぜい芸ができる程度なの〜」

ペろ、っと舌を出しながら少女は、自分は成なる、園木仁成（ただし此処では日本語／漢字表記）ですと名乗っていた。名乗りながら真也に、抱えて大事に持っていた束から紙を一枚、手に取って抜き渡していた。そこには『カチヨウフウゲツ』と一座の名前が書かれたサーカスの案内がされていた。アーノルドに滞在している期間中の3日に一度の公演で、成は一座で育ち、空中を使った舞芸が得意なのだという。

「よかつたら観に来て下さいね！ あそこの看板の裏で練習している仲間もいたりしますから。成に聞いて来たって言えば、きっと歓迎してくれますよ！ ……じゃ！ 今日はこちらと急ぎで、ごめんなさい」

成という少女は日向の匂いをさせて向かっていた方へとまた小走りに駆けて行った。横目で成を見送った後、真也は両腕をさすりながら身震いして、ふ、と軽く一笑してみせていた。

（おかげで、熱を追い出せた）

先ほどまで苦しんでいた身体は楽になり、足取りが軽くなっていた。

しかし真也は成に言われた方角へも、進んできた方向へも戻り向かおうとはせず、全く別の道へと切り替えたかのように歩き出している、切り揃えられた草花や芝、規則正しく配列されて整い装っている綺麗な石畳の道に行く。さて体調が戻った、実行するかと彼は

大空をこんなものと見透かしていた、『俺は行く』……行く。

光の者を殺すため。

……

ベイグラウンド、トキノ会長。アーノルド北緯35度40、東経139度46のユーリス地域にて輝岩石マコウを採掘するのに規模を拡大着工し、マコウの特性を生かして発展事業による大成功を収めていた。マコウ……それは自己反応性物質が多分に含まれ、燃焼に必要な酸素をほぼ用いずに酸化還元反応と類似して破壊的エネルギーを発生させることができる、爆薬には適した非常に危険な鉱石である。発見し研究され尽くす域にまで達するのに数十年と労したが、扱いは理解を示しつつには開発技術者の祈願勝利か、年々と死亡・暴発事故の数は減少していった。

悲惨で苦汁の経緯を経たものの、制御、管理体制システムの確立や事業推進に拍車をかけ、貢献したとして、被災した民間や医療、各自治体方面からは社会的功績を多く大きく讃えられてはいるが……水面下では、分からなくなってきている。

マコウから得た収益は推定だが、年間数百京にはなるのではないかと噂されていた。宇宙にも勢力を伸ばした事業の中心となるべきトキノ会長は病災どころかピンピンしており全くもって健在で、今年で還暦を迎えるらしかった。

時間が夜の刻に入り星の姿が雲間から見え隠れと繰り返すその時分、黒艶の大椅子に腰掛けてひとり、シンと静まった暗がりの私室でトキノ会長は寝言のように呟いていた。「あと3分……」

肘をついていた石鉄隕石製大机の上に、数十枚の紙幣が無造作に

散らばっている、数枚が床に落ちていた。

『オークション終了まで、あと2分です』

トキノ会長、彼の左手首で金光沢に光るプレミアもの的高级腕時計から知らせてくる情報には、イライラとイラつきが絶えなかった。空いた右手の指でカツカツと机を叩き、不似合いにも足のビンボウ揺すりが彼の気を治めようと休まず頑張っていた。目を閉じれば、思考ビジョンのなかに『情報』は提供されている。

「む」

衝撃が走っていた。価格が跳ね上がったためである。

『ID：X5XX16X2X9XX “クロースト・ジャー 禁じられた壺” 現在の
価格：503,000,000,000,000 PY』

桁数が増えていた。「5030億だ」と！トキノ会長の目がつり上がった。こめかみがヒクヒクと唸り、血管を浮かび上がらせていた。きつく握り締められた右手からくる振動は、伝って床にまで届いている。「一体誰が……」彼は、自分の欲する情報を探し、ビジョンに呼び込んでいく……IDは半分以上が隠されているが、頭文字の3つの記号には見覚えがあった。いや、彼はすでに知っていて、『確信』していた。

「クルミめ……」

下口唇を噛み締め、眉間の皺が消えることなく極端に怒りを顕にし、彼は急いで手を打った。自分の登録ナンバーを告げたあと、

「ID：X5XX16X2X9XX “クロースト・ジャー 禁じられた壺”、799,900,000,000 PY」と、また遥かに上回る金額で切り込んでいった。

彼は賭けに出ていた、7999億PY。入札単位（現在価格に対

し最低限上乘せ必要な金額）自体も跳ね上がっており、他に入札をする者の気配もなさそうだった。これで引き下がれば笑い、とトキノ会長は残り1分と表示された更新履歴に固唾を呑んで見守るに徹していた。

もし相手がそれでも食ってかかってきたのなら延長、意地と財産を懸けた、生き残りゲームとなることも予想される。

（どうだ？ ……どうなんだ、奴め……）

額と手の平にじっとり嫌な汗が浮き流れていた。喉はカラカラに渴ききり、体が発火しそうなほどに熱く、時の経過が遅すぎて憎らしかった。

やがて彼にとっては朗報が届く オークションの終了、相手は入札をしては来ず、管理者側からのトキノ会長への『勝利』宣告だった。

「うっしやああああッ！」

雄叫びは、大地の空気を震わせていくのだろうか、彼は年に似合わず若気の如く、勝利の瞬間に机を乱暴に叩き立ち、叫びながら散らばった紙幣を掴み、またはすくい上げバラ捲いていた。紙の吹雪は特殊インクの香り、舞うは儚き、支払い消える……。

彼は夢を金で買い、勝利、名誉を手にしたのである。「ふははははは……」腹から次々と愉快が込み上げてきていた、痒くて仕方がなく、まだ見ぬ落札した壺が脳裏を駆け廻っていた。

その時だった。

黒い塊が銃弾と化したそれが、トキノ会長の頭蓋骨を撃ち抜いていた。

「ぐ」

反動で出た声が、短く聞こえただけだった。

（な……ぜ……）

カカカと痙攣した口は続き無く、彼は倒れる、傍の机に適當さでぶつかってさらに頭を傷めつけ、沈んでいた。仰向けで絶し、僅かな出血だった量は増し、床の古傷を伝い赤く侵食していつていた…もう彼が起き上がることは、ない。

……

曲折した角度はプラスマイナス、トータルで62度余り、軌道は弧でも直進でもなく蛇のように曲がりくねり、窓を通りぬけて標的を貫いた弾丸は消失していった。見事に目標物だけを捕らえたこの犯行を、誰が把握し身を防護できようか、至極困難である。

狙撃者はテレキネシス者。軌道を自在に曲げて、弾は彼の意志通りに目標へと辿り突く。犯行など予測不可能な闇のなかに、ひとりの少年が風に靡き揺れながら都市を見下ろしている。無数の生活者が存在し、底に広がる風景は、上空を反映させた星図のようだ、光あるだけ生物がいる。目を細く、眠気も少々、指と指を擦り合わせながらの彼の姿勢は億劫、とてもだるそうだった。

『あれらを全て金にかえてやる……』

彼は、とんでもないと言われることの、理想を抱いていた。

シュセンド・2

惑星アクラム、競争国家であるペリウドキングダムでは、言葉の通りに争いが絶えなかった。

それもそのはず、ペリウド民のその生まれ持った性質は、物ごとに優劣や勝敗をつけたがるものである。人より抜きん出るか、力で屈服させるのか、遅れ油断する者には死、あるのみか……安らぎからは、程遠い国家である。

そこから逃げるようにして船に飛び込み、今はアーノルドに拠点を移住しているガタイの大きい男がいた、名を直人といった。幼少時、まだアクラムにいた頃は寺に預けられ鍛えられていたのだが、気がつけば脱走していた。外見からの体格の割には、逃げという事実の弱みがある……それが彼の、常時の悩みだった。

「今朝は風が気持ちいいな……」

少し伸びて襟足にまでかかっている真っ黒の髪の毛の隙間から、汗が噴き出ている光っていた。洗濯された物を干しながら、狭く老朽化したベランダで青い空を眩しそうに見上げていた。

もう何年、十何年と住む傾きかけた古いアパートでの彼は非常にカタブツで真面目で、朝は4時起床、夜は9時就寝、3日に一度の身体測定、健康診断、自己補正ときっちり習慣づけていた。元々『休む』という概念の乏しい彼だが、休むと決めると思いきり羽をのばしている面もある。

一部が崩れかけている屋根を持ち、あまり大音を出すにはよろしくない危険環境なのだが全くおかまいなしで、元気な明るい声が下の階の住民から響いてきていた。

「直兄ちゃん、おかあちゃんがお昼一緒にどおですかあ、つてえー」
呼びかけてきていたのは、まだ4歳くらいの子どもである。直人は洗濯物の空になったカゴを部屋のなかへ入れて片付けて、それからベランダ越しに下の方へと返事をした。

「いつもすみません、すぐ行きます」

余裕を持った口調で返していたのを勢いで押す子どもの声が、また響いていた。「ああんいいよお、そんな遠慮してないで、早く来てえー」子どもは身を乗り出して欄干にもたれ、顔を覗かせていた。「わかったから待て、すぐに行く」直人は子どもに危ないからと、注意を喚起していた。

言われて子どもが引つ込んだ後は空中からトカゲのような細胞組織を持つシオマキトンボが飛んで来て、ベランダや壁に何匹と張り付いてしまつてそれから動かなかつた。此処ではよく見る光景だったが、容姿の面ではあまり好まれる生物ではなく、むしろ害虫扱いされている地域もあつた、直人はすでにそれを充分に承知していた。

(無駄な殺生など、せぬゆえ……)

直人という男は誠実で、優しい男である。毒性を持つなどといった、たとえ害ある対象だつたのだとしても、むやみに壊そうという気はなかなか起きない、そつと摘つまんで外の世界に出してやりたい、害ある物でも壊さない。いつかそれが、自分に災いとなつて降りかかり襲い訪れる日があつて来るのだらうと……直人はすでに予想し終えて、頭のなかの何処か片隅に物わびしくも置いていたのだ。

下の階の住人たちと和気あいあい、食事を終えた直人は、自分の部屋へと戻る時にドアポケットから数枚のピラを抜き取りつつ目を通していった。そのなかの一枚に、ピタとめくる指が止まっている。

「ほう……」 『並木公園にて大サーカス来たる』と大見出しで書かれていたそれに、直人は関心を持っていた。

「セイラを連れて行ってみるか、きつと喜ぶだろう」

今後の予定を決めて直人は、ビラを折りたたんでカラーボックスの上に置いていた。横には飾り気のない、シンプルな木製ツートンカラーの写真立てが置いてあり、白いモコモコとした毛の犬を抱えていた女性が直人と並び、微笑んで写っていた。

翌日のことである。シャツ・アンド・セット「拡大／縮小制限ON/OFF切替可能」装置を内蔵したメディアツール『携帯こみゆ』シリーズのうちのひとつ、装着していたメンズ用腕時計から直人の脳へと送られてくる情報のなかで、『トキノ会長、殺害さる』と事は大きく報道されていた。

それによると、競売にかけられた“クローズド・ジャー 禁じられた壺”は、せつかく落札されたにも関わらず新しい持ち主を失い、行き場を失くしかけていた。所有の期限が近日で切れるため、代替りの保管者を決めなければならぬという。討議の結果、アーノルド取引委員会により、壺は次点であるクルミモダカ副理事長が繰り上げ落札するに落ち着き、渡ることになった。

主な報道内容はどれも同じように見え特にな変わった所はなく、各マスメディアから発信されて、我いち先にと急ぎ伝えられていた。だがしかし世間の関心を集め目が向けられるのは『落札者が殺害された』という事実の方ばかりで、媒介が紙面であっても、端に寄せられていたたった一行だけの小さな事実には、誰も注目はしなかったのだ。

“トキノ会長の左小指、不明” と。

……

……闇取引市場、ラッカルド。本拠地を知る者はいないか、口を絶対に割らないという暗黙の契りがあった。万が一の裏切りには、それ相当の制裁が待っているため覚悟を要している。

神出鬼没で行動する『ゼ二屋』と呼ばれた者たちのことを総括してラッカルと呼ぶ。また、分派ごとの総長にあたる者を指してラッカルともいう。ラッカルが集まる場所が、ラッカルドである。

ゼ二屋は、有力な政治家、人望のある権力者、スポーツ界のヒーロー、神と呼ばれた芸術家、など、優秀で明るい未来と期待、現行を保っている光の者の首に唾をつけ懸賞金をかけていた。ラッカルと密会し、自分の取り分を算段、交渉して金額を決定、そして施行する。光の者が重役、重要なほどことさら金額は上昇し桁が全く違ってくるという。需要の数と量に応じて供給が必要となるのだとすれば、ラッカルは、実質に答えただけである。

法が無かった。

無法地帯は領域を余す所なく広げていき、星の 대기圏を超えていつていた。

「やあ

まずは、挨拶が決まりだった。礼儀の欠ける者とは誠実な取引はしないというのもラッカルドの掟である。「やあ……お早うござい
ます」

頭を垂れて、真也はPP袋に入ったゴミのようなそれを袋ごとゼ

二層である相手に引き渡していた。2人が面会した場は見晴らしのよい大庭園、先日にも訪れた、有緑公園である。時はまだ早朝、辺りには人影もなく、小動物たちもぼそぼそと活動し始めた頃合いだった。

手から手へと手渡しで受け取った相手は袋を開けて中身を確認することはなかったが、「確かに」と相槌を打っていた。

薄く笑った口元しか見せず、心中は想像し難かった。一部しか肌を露出させていない重装甲の服「パーフェクト・スーツ」は、相手の自然的な動きからでは非常に軽く見え、不便など皆無だろうと思えていた。

「確かに受け取った。これからシカンへ運んで行って、検証しよう。もし、これがあのトキノ本人のものだと照合一致で決が出たら、また連絡する……3日と約束しよう。3日待て、ええと君は……君の名は……」

指の関節や爪の先にまで細部に宛てがわれ強化されていた相手が、真也を面白そうに見ているとも仕草からとれていた。やはり口元が微妙に笑い、真也を少し不愉快にさせていた。しかし真也は、構わず自分の名を告げることにしていた。

「円比角 真也」

名前を明かすなど浅はかなと思われることもしばしば、だが、あまりにも堂々とし過ぎてそれが果たして本名なのかどうか判断つきかねる所だった。「ハハハ！」相手はついに、声を上げて笑ってしまった。

「真也、だったか。聞いた覚えはなかったが、明かしてくれてありがとう……発音からすると、外宇宙語でそんなのがあった気がする

な、カンジ、漢字？ だつたかな……とにかく、あんたの名前は何となく親しみやすいぜ、何でだろうな？ カカカ

茶化したようだが真也には通じていなく、何がそんなに満悦なのかが見当つかなかった。

「我も小体の一部を見せてやるうか」

相手なりのサービスだつたらしい、胸甲の辺りを手で押さえると、真也の予想していなかったことが起きてひるみ数歩下がり、驚きを隠せなかった。相手の上部だけを装甲から外し現れる、窓が開かれたように、隆起に引つ張られたゴム状らしき素材の肌衣が現れていた。

相手は雌性、……女だった。

顔は残念ながら覆われたまま、判らなかった。「アデユウ」PP袋の絞りめを口に啞えて、ゼニ屋だった『彼女』は助走をつけて爽やかに走り去つて行く……その時にちょうど、世界は朝の光に侵攻されていつていた。

朝露が零れている。此処はアーノルド、空気中の成分も燃焼への条件も水の変態環境も、法への定義もアーノルド式、ア流、ア録、ア紀、基本的に無法で自由、アーノルド・フリー、事象は時間ランダム・アクの節セス。適当と言つてしまえばそれまでで、アーノルドはあくまでも『準惑星』、『発展途上』、『造りかけの宇宙』だった。生まれた者に初に与えられるもの、それは

「名前か……」

ふと、成という少女を思い出して、境遇の一致部分を考えていた。成はサーカスで働き、育てられ、生活している現在。つまりは親のいない、みなしご、という可能性がある……真也も親はおらず、成とは近い道を歩いているのではないかと窺っていた。

真也が自分について知っているのは、チクウという星？ より来た船から、落ちてしまったことだった。それが事故か故意によるものなのか、定かではなく知る由もなかった。真也は、育ての境遇に拾われて、今現在に向けて発つ

「クオリア……」

……

白い空を、見上げていた。光星の恒星は、美しく輝いていた。遠くでは、パン、パパンと花火の音が聞こえていた。大道芸人サーカスの開演日知らせる一報だった。

……真也の足は、吸い寄せられるように道を決めて、順路に従っていった。次の……

真也、その名は、チクウから持ってきた自分の所有する唯一の物。知り得る少ない情報は自分が落ちて発見された時に育ての境遇たちにより与えられたもの……まだ物心つく前のことだと記憶の曖昧さを言い訳でカバーしていた。

真也という名前を手掛かりに親の身元を判明させることが可能かもしれない、だが真也、彼は自分の故郷や自分を生んだ者たちには特に興味が注がれなかった。気にするのは、先ほど手渡したトキノ会長の一部がちゃんと検問で一致し通るのかどうかだった。

彼は『シュゼント』である。

シユセンド・3

「酷いわ！ あなたが大丈夫だって言っただから信用して買ったのに！ ……この、『ルネツサンス・赤い薔薇』！」

……それはただの鋼鉄でできた一輪の赤い薔薇の花で、手で持つと必ず「ルネツサンス」と言ってしまう効果をもたらし制限ない幸せを呼ぶという、かなりの胡散臭い代物だった。ところが流行りも過ぎると効果は薄れ、観賞するだけで、本当に幸せがやってくるのだからどうかを確かめる術すべはない。女性はついにキレ、業者に連絡と書きクレームをつけていた。

「知りませんね奥さん、騙されたですって？ ……失礼な。仮にそうだとしても、騙された方が悪いんですよ、よく解ったでしょう？ 高い授業料払ったと諦めて、どうぞ引き続きルネツサンスして下さいね〜」

面倒臭そうに、相手からはそんな返事しか来なかった。

売った買ったで契約は成立していた。この2時間ドラマのなかの世界上での設定では、返品のみくクーリングオフ期間が一週間、通販で買った物だが、女性が商品に疑問を持ち始めた頃にはとうに期限は過ぎていた。よって適用されず、返金も返品もされない、することができなかった。

紙面の上での約束は絶対、証拠は残る、判の威力は絶大である。注意されたし、気がついてからでは遅すぎている。ドラマの女性はあまつさえ旦那に黙って消費者金融で借金をし、金利すら払えず生活を追い回されるようになって行き、地獄を味わうことになり、輪

つかのついた縄に世話になるかもしれないと思い詰める直前になってやっとガラスの銀と呼ばれるミナミの王族に九死を救われたという……感動のシンデレラ物語^{ストーリー}だった。

直人はまだ最後まで見終わっていないうちに、家庭用小型ビジョンの電源を消していた。「つまらん」……だが1時間放送分だけは観終えていた。

直人はこれから、女性とのデートの約束をしていた。妙にリーゼントの髪型には気合いが入り、テカリが美しかったが、決してフザけているのではなかった。襟足に垂れていた細い髪がサラ、と流れていた。学ラン長ランにも見える似た漆黒の服装が、とても彼の真面目な気質には合っていた。

「さて……行かねば」

手には何も持つてはいない、服の上着の内側に、必要最低限の物は収納されていた。

降水確率50%の、晴れか雨がどっちつかずで半端な空模様だった。雲が流れて一定の方向へと進んでいた。行くと決めてから前売りの電子券を買い用意していた直人は、待ち合わせの公園へと急いでいた。公園では連日、大道芸人によるサーカスが繰り広げられており、一度でいいから観てみたいものだと思いを待っていて直人は内心とても楽しみにしていた。ひとりで行くには周囲の目が気になり憚れていたのだった。

公園で待ち合わせていた恋人のセイラを見つけて、直人は横を見ずに、それでも誰ともぶつかることはなく、一心に突き進んで行った。セイラは噴水の縁に積み重なって並んでいた煉瓦に座って片手の本を読んでいたが、誰かが近づいてくる気配を察して顔を上げる

前に本を先に閉じていた。

「待たせたか？ …… すまん」

直人の方を向いたセイラは、意地悪っぽく笑ってみて言い放っていた。

「うっん、少しだけよ。28分17秒くらい」

僅かながら顔を引きつらせていた。お互いに複雑な心中のなか、セイラがピヨンと飛び跳ねて、直人の前で堂々と両の手を広げ、「さあ行きましょダーリン！」と呼びかけていた。

「ダ……」

言いかけて直人は、ゴホン、と咳払いで誤魔化していた。「それじゃ行こうか」……

歩きだす2人が去った後、噴水の前に別の者が現れている。

少年はぶらりとそこへ立ち寄っていた。

……

シュセンド、それは、冷血の下僕。雇いは、雇われを駒として扱う。切つて捨てるも餌を巻き捨つも、自由である。海老で鯛を釣るが夢である。

シュセンド、反発の意志はない。服従が基本、死よりも生を選んでいる。

しかし真也には解らなかつた。自分が何故、此処にいるのか、そして武器と成り得るものを持ち歩いているのかを。生きたいからだ……模範解答を聞いても納得ができなかつた。

……

多目的ホールである、セミサホール。観客が半円形に舞台を囲う

型で、3階席までであった。だが3階部分は特別仕様となっており、^{タイプ}一般の客席とは扱いが違っていた。

幾多の特殊イベントや通例講演が予定行程通りに行われており、通常なら場所も待遇も、駐車面積や金銭面など主催側にとって浮き彫りになるだろう問題的条件が発生するが、交通の利便性やドーナツ化による人口環境によつて非常にすつきりと解消され、解決されていた。

当日券込みで登録を済ませた真也は、本日これから催されるサーカスを観るために落ち着けようと、2階の観客席に腰つけていた。開演までには時間があるためか人はまばらで、子連れが多いように思われていた。狭い平路を走り回る子どももいた。

席ですつとたるそうに背にもたれかけて、真也は記憶を辿っていた。自分の放った弾丸が、世間で言う『大物』の命を奪ったのだがそれに対して震えも後悔もしていないし、むしろ次は誰だと、情報媒介を毎日睨んでいたのだった。

やがてサーカスは始まった。

シヨウのライトは白黒赤緑青原色鮮やかに、舞台から観客席へ、観客席から舞台へ、上手から下手へ、中央一点に集まれば大げさに爆発音を出して、紙の吹雪が氷の結晶のように輝いて舞っている。

出てきていたのは団長と思わしき虹色ピエロの格好をした者で一番偉そうに振る舞い、玉と輪とナイフでジャグリングをしながら、進行の挨拶をしていた。象と呼ばれるキリンのような首の長いねずみは火の輪をくぐり、水の入った槽のなかへと潜って溶けていった。口笛を吹いた、コック帽を被っているムルサイ族は、後で燃えて消えていた。団長の頭にのった全長100メートルの大ガチヨウは自慢の羽を見せびらかして次元の向こうへと飛び立っていった。

観客席からはどの演目につけても拍手喝采で、次は次はと次を待ちわびていた。

すると、何処かで見えた覚えのある少女が舞台の上に降り立っていた。目を細めていた真也は、欠伸をしながら凝り固まっていた肩を動かし、前屈みになりながら舞台の上を注目していた。真也のなかで負担が減り速くに動き出した血流は、熱を帯びていった……

成の登場だった。成の愛くるしい笑顔は、観る者を惹きつけている。成は王子の衣装でくると滑らかに回転し、ペアの相手の肩に跳んで足をかけ、さらにジャンプをしている。着地は成功で、備えつけられ立てられていた大きな円盤の前に降りていった。

成がひとたび踊ると、ひとりのはずが多重に見えて、時間差でそれぞれ動きをずらしてストリートダンス・ロールオフをしているみたたく極めて華麗だった。その内に方向転換した成は、ダーツの的を模した円盤の前で自らが的となるべく進み出していた。盤には得点が輪状ごとに振られている、だが、成がいるために矢を放つても中心は狙えなかった。団長である虹色ピエロはそれでもダーツの矢を持つて的の真ん中を狙い、成を無視して投げようと時を計算し構えていた。

当たるはずがない、でもひょっとして。そんな観客の不安と期待に答えようと、盛り上がりは最高潮を迎える準備を整えていたかに思えた……が、予想は遥かに超えていた。

飛び出したダーツの矢ではないもうひとつの『弾丸』は、虹色ピエロの心臓めがけて貫き通った、成の手前、目視の寸前で止まる。

落ちていった、貫いた白い塊は減速せず急に力を失い、落ちてしまっていた。おかしなことにそれまでの弾丸の軌道は弧を描き重力に従って下方ではなく、上方へと反り、摩擦による空気抵抗を受けたのか、ある一定以上の高さに入った後はピタリと活動を停止して……落ちてしまっていた。

開けた穴の向こうに『彼』はいたのか、果たして。
「き」

成の足元にはひとつまみの白の塊　吹くと軽そうなポップコーンが転がっていた。フラッシュバックという、過去が点滅して成に危険だ回避しろと知らせていた。動きを疎かにした体に叫びだけは許してくれていたようだった。

「キヤアアアアア！」

金切り声の悲鳴は遠くまでよく響く、成は視界を閉じた、そして真っ暗になっていった。

団長の体は撃たれた衝撃で速やかに倒れ後頭部を床へと強打する。沈んだ後は、動かなかった。惜しくも飛び出せなかったダーツの矢は、手からコロリと寂しそうに……こぼれていた。

ざわざわと……不吉な波は押し寄せて伝播し、ホールの天井、床、入口出口、耳の奥と隅々にまで行き届いていった。「まさか……」観客席から誰かが光景と推察を口に出している。それが引き金となり破滅へと展開していこうとしていた。

「死んで……」「何が……」

「嘘。嘘でしょ……演、出、よ……ね？」

「……でも。ピエロは、起き上がって来ないぞ!？」

あちこちからの声は幾多に重なり不安は膨らみ、場は騒然となっ

ていった。「本当に死んでるみたいだぞ……！」男の野太い声が決定的だった。悲鳴が発生し始めていった。

「いやあ！」

「助けてええ！ 人殺しいい！」

「逃げる早く……！ 殺される……！」

目も当てられず熱くパニックになっていった。「皆様、落ち着いて下さい！ 落ち着いて！」団員たちは客席と違い、対応に切り替えていた、しかし。

「此処から出してえええ！」……

群集はもはや耳を貸さない、叫んで次は連鎖するように皆はまた立ちあがりまた釣られ釣られて。出口へと向かって、集団エネルギーと化したそれらが台風並みに轟々激しくぶつかっていった。ワアアア。イヤアアア。阿鼻叫喚、これはまさに狂気だと、断定寸前だったのだろう。症候群は暫く続き、平安は砂埃でかき消されてしまっていた。

「お、落ち着いて下さ……わ、わあああ！ ……」

何とかしようとしていた若い団員のひとりか2人は勢いに負け蹴られ弾かれて、最悪な場合は腹や腰など部位を容赦なく踏まれていった。止まらない波紋はどうしようもなく、止まることがなかった。無力さに憐れと他の団員の一部は頭を抱えて壁際でシクシクと泣き出す者もいた。「落ち着けえええ！」「やめて下さ……」

苦空しい。

(何だこれは……)

席を立たない者もいた、1階の、出口からは遠く離れていた直人たちだった。

「怖い……」

座ったままで隣の直人にしがみついていたセイラは、異様な光景を遠巻きに傍観して言っていた。直人は震わせているセイラの肩をさすってあげながら、セイラと同じく歯痒い思いで様子を見ていた。「見るな。何とかして、外へ行こう」気味の悪さに耐え切れなくなる前にと、直人はセイラと共に席を立ち、背後にある舞台の、時の停止した惨状をちらりと気にしながら外の空気を求めて歩き出して行った。

2階からでも外へと出ることが可能であるらしい。その証拠に気がついた団員が数人、非常の時の備えで設置されていた、普段はダスト用の（衛生面では人体に影響はないほどクリーンな状態である）シユートボックスを開通させていた。穴は人が容易く出入りでき、螺旋状になって安全面からでも考慮されていた。冷静に辺りを見回していた直人は見つけて頼りに2階へとセイラを連れて呼びかけていた。「あそこだ」

促されて手すりにつかまりながら階段を上り、外へとゴールをめざしていた。

2階に着きのろのろとしていると、早足で通りかかった少年と直人はぶつかりそうになって、直人の方が避けていた。

「おっと、すまん」

少年は聞こえない言葉を呟いて、また素早く去って行った。恐らくは謝っただけだろうと思われる。「もう少しだから」直人は前を見て歩いている……

散々だった現場から脱出に2人は成功し、待ち合わせで使った噴水のある場へと逃げるように避難してきていた。「ふう……」やつと安心を手に入れたのだと、額の汗を直人は拭って俯いていた。

集団ヒステリー、そんな言葉が浮かんでくれば、寒気を覚えていた。シヨウの最中の惨劇、あれは事故だったのか、巧妙に仕組まれた殺人だったのか、それとも、集団感染したなかで生まれ出た犠牲者だったとでもいうのか……直人の想像は、尽きては行かない。興味も湧いていた。

(気になるな……)

サーカスは無論、中止だろうということぐらいは読めて、外へと同じく脱出してきたに違いのない観客たちを眺めていた。段々と公園内は賑やかになってきたようで、おかげでより一層、安心感に満たされていた。

(もう一度戻って、詳しく調べてくるか……)

傾きは建物の方へ。直人は、今にも行ってしまいそうになった。

「何処へ行くの」セイラの怪しんだ口調の声が直人を押し留めて引っ張り返してきていた。「え、と」

直人は仕方なく頭を掻きながら、「ちよつと戻ってきていいかな、気になるし」と改めて現場のホールの方向へと目線を移していた、それがセイラの癪にさわったとは、思いつきもしなかったようだった……直人は頬をパシリと、叩かれてしまった。

「私のことより、事件の方が大事なのね」

「……」

我慢を外した声はさらに震えて、傍にいてほしい時に傍にいてくれない、もういいわ……そう一方的な言い分を吐いたセイラは泣きながら去ってしまい、残された直人は茫然としたまま叩かれた頬に触れて鈍く熱い痛みを確かめていた。

衝撃に直人は落ち込んで、昔からそうだったんだと、慣れてはきても相手との接し方がやはりまだまだ解らないんだと影を背負った。生まれた星では、『生存競争』のせいで周りは全て敵だからと教育されていた。心分つ者、友など、作れなかつたし信じてはいけなかつた。自分が馬鹿をみてしまっただろうからと。それで。

「だから此処に来た（逃げてきた）……」

……此処はアーノルド、顔を見上げたその時に赤い流星は横一文字に伸びて、まるで危険を知らせているようで真まことの安らぎを得るには程遠い気が何処かしていたのだった。

シュセンド・4

入り組んだホールの通路、突き当たりの一室に変わり果てた団長の遺体はいつたん収容されていた。床に寝かされ上から白の、ビニールに近い素材のシートをかけられて、遺体は付き添って椅子に座っていた成と同じ時を共有している、というのも、おかしな言い方だった。消えた命に時間はあるのか。

「水でももらってきただけよ、成姉ちゃん」

衣装や小道具、音響材の一部や小型照明器具といった興行用の物が部屋の半分を占めており、遺体が中央、その横で椅子に腰かけていた成、ドア付近に尻尾の生えた毛深い男の子がいて、聞かれた成はちゃんと答えていた。「うん、ありがとクウマ」

クウマと呼ばれた男の子は隠さず明るい笑顔で「よっしゃ」と喜び跳ねて、廊下をタタと足音元気よく走って行った。ずっと暗く沈んでいる成のために、ひと働きをしたかったらしいと察する、子どもだが芸人仲間だった。

成の疲れた瞳に、シートをかけられた向こうの……自分の師でもあり親代わりでもあった団長の面影が映っていた。親下を何らかの事情か都合で離れた成は、師の下で芸を覚え、演じ、腕を磨いていた。育ての恩を抱きつつ感謝という言葉ではとても足りず、尊敬という表現では括り切れない、偉大さの正体は、境界を飛び越え届かぬ所にあった。

(団長……)

悔しかった、失ったことが全てより憎く、成を苦しめて放さなかった。

するとそこに、来客だった。始めクウマが戻ってきたんだと勘違いした成は、「おかえりなさ」と言いかけて振り向き驚いていた。

そこに現れいたのが真也、自らをテレキネシス者だと告げていた、記憶にまだ新しく覚えていた少年だった。大きく開口、成は複雑だった。

「あなたは」

「……どうも」

相手の方が自分より余裕があるのだろうと、成は笑顔ではなく目を背けて、真也には辛い表情しか出さなかった。

「ごめんなさい、せつかくシヨウに来てくれたのにこんな……」
こんがらかりそうな頭はやがて静かになった。

真也は俊敏な動きで成の背後にまわり、首筋に手刀で一発、成を気絶させたのだった。

ぐらりと傾いた体は、床へとずり滑り伏してしまっていた。成が大人しくなった後は、真也の自由な時間が訪れる……真也の狙いは、遺体の一部の回収だったという。

近づいて身体全体にかけられていたシートを取っ払い、真也は頭部に指を当てて考えていた。……単純なことだった、どの一部を持って帰ろうか？ どれでもいいと、口には出さずに目が言っていた。迷いには隙ができる、それも単純なことだった。

「やっぱり、あなただったのね」

凍りつく瞬間とは、この時の様相にぴったりと合うのかもしれない。片膝を立て遺体と向きあっていた真也の首後ろに、気絶していたはずの成がこちらも手刀で構えて威嚇していたのだった。

「あなただったわ……団長を貫いた向こう……私には見えた、団長を狙うあなたの姿が」

「見えた？」

真也の疑問に即座に成は回答を与える、しかし悲しみの顔は崩れていなかった。

「私、視力めはいいの。でも変ね？ 位置から考えて、1階の観客席は見えずにあなただけが見えたなんて。でもそんなことどうでもいいわ……『あなた』が、団長を貫いた」

成の目は真剣そのもので、嘘を言っているとは信じ難かった。成が穴を貫通して見た真也とは、何処にいたというのだろうか。実際に真也は直進で狙いやすい1階にはおらず、2階にいて狙撃していた。軌道は前回同様に曲がりくねり、目的だけを果たせとスピードは落とさず加速すらして獲物を探して行った、まるで生物で意志を持ったように。

「許さない……！」

怒りで涙も混濁した成は真也に牙を剥き、手刀をやめて真也の肩あたりを掴んだ、肉ごと掴んでいた手の指先の爪が鋭く食い込み真也の顔を曇らせていた。

「なら……やるしかないな」

『なら』と、決めた途端に真也は成の手を振り払う。「!？」掴ん

でいた右手はいとも簡単に真也から離れてしまっていた、成は忘れていた、真也がテレキネシスを使えることを。彼は、所詮はトリックだと言っていたが、何らかの方法で遠隔^{タネ}を作動、もしくは遠隔へ動作をさせ、点Aから点Bへ、意志を与えられた弾丸は、与えられた空間を認識し磁場や電波、気圧に湿度に光による影響をさほど受けずに最短で済む軌道を探して計算をして、実行へと移す、結果を出していた。成の腕も遠隔からで操作が可能なのは判らないが、退けられて成は一瞬、ひるんでいた。

「よくも」

仕切り直して、成は屈んでいた真也に襲いかかる。手をつきながら上手く転がる真也だったが、成の方が速さが上だった、すぐに真也に飛びかかり、何と力で押し伏せることができたという。

成の体は仰向けた真也の上に覆い被さり、真也が成の下で、お互いは睨みあって黙っていた。

成の両手が真也の首を絞めていく。成は華奢なようできて真也よりはスピードも力もあつたらしい、決着の風向きはどちらに向くのか判らなかつた。

「よくも……」

何度言葉を吐き試してみても、首はそれ以上の力で絞められることはなかつた。真也は内心、何を迷っているのかと思っていたに違いないが、遠慮せず成の体をどん、と宙に浮かせて、すかさず立ち上がって壁へと寄り、成に前を向けたまま後退していった。迷いには隙ができる、機会を得たなら、即実行だと真也は

「成姉ちゃん、水持っ……」

成にとってはあろうことが、コップに水を入れて戻ってきたクウ

マが部屋へ入ってこようとしてドアを開けてしまった瞬間だった、真也がクウマを引き寄せて羽交い絞めにして、人質にしてしまったのである。「クウマ!」「うわあ、ああ!」

ガチャン、ぱりん。床に落とされたコップは割れて、クウマの身は拘束されてしまった。

卑怯者、と成は声を上げそうになった。クウマを楯に、真也は壁を背にして移動していた。そして外へと繋がる窓に着くと、簡易式の施錠であり簡単に開けた窓から真也は無駄な動きひとつなく、優雅に自分単身だけを窓の外へと放り込んでいった。

「待ちなさい!」

慌てた成は、解放され置いて行かれたクウマのことは後に回し、窓へと飛びついていった。「お姉ちゃん……!」すがりつくようなクウマのひと声が、成に少しの考える時間を与えてくれていた。

成は迷ってばかりだった。さっきもそうだ、何故に首を絞め千切らなかったのか、怒りを爆発的エネルギーとして最大限の力に発揮すればよかったのに、何故そうできなかったのかと……後悔の大きさは小さいが、『ある』というだけで気持ちが悪かった、消してしまいたかった。

「クウマ、皆に『ごめん』って、言っておいて……」

窓の枠に手をかけながら、成は騒がしかった心臓の鼓動に耳を澄ませていた。聞いていても速さの加減が判らないそのリズムに、飽きていった。こんな所にいつまでも、いたって無駄ではないか。成は決心する。

「お姉ちゃん……『彼』を、……追いかけるから!」

声とほぼ同時に、成は窓から出て行った。「×××……!」成の離れていく後方では、子どもの叫んでいるさまは暫く続いている。

それが成の行動を阻害させることはなく、窓から着地、道を見つけてひたすら走り、道を逸れても戻ることはせず、『彼』の痕跡を辿り

どこ行く先か、未来。

どさくさに紛れても、真也は手に引き抜いてきていた団長の髪の毛を持っている。しっかりと『目的』を果たしていた。これをゼニ屋に渡せば、報酬がもらえるのだった。

彼は『シュセンド』で、金の奴隷。時々には、救いを求めたその嘆きがある。「クオリア……」

彼を救う者はまだ、この時にはいなかった。

……

大宗教界クリウム。大司祭サンタメリアの愛娘であるクオリアは、楽園の庭園にて花々と戯れていた。

「見てお父様、ポポロアがこんなに……」

陽は花の畑の面々を優しく包み込み、そのなかでクオリアたちを穏やかにとけ込ませ、自然と一体化させていた。人工との線引きは失われ、楽園は固有で持続していた。

司祭の温かい目は、クオリアを守っていた。

「いいか、クオリア。お前は一步も、外へ出てはいけないよ……」

厳かな白の装束に白が基調の装飾シールドマスク仮面を身に着けた大司祭は、そう諭していた。首を傾げることしかできないその決まりが、クオリアにとっては不満でもある。

「どうして？ お父様。外には一体、何があるの？」

表情を変えない大司祭である父親は、ちゃんと答えていた。瞳だけは眈々と、しかし優しくかった。

「汚らわしいものさ……」

庭園の照らされて光輝く噴水には、2人の影が映っていた。

選ばれた者だけが踏み込める地帯というものが存在する。そこに到達するまでには鍛練、業「カルマ」が必要で、肉体は滅びても行為は輪廻し受け継がれている。可視で見得る物質のスープである宇宙では、構成された心の臓と血と肉と骨と皮などとは所詮、母なる宇宙から借り受けた物にしかすぎない、即ち、身体はレンタルだった。これをレンタル思想といった。

寿命という時を与えられた借り物は滅び終わると返還されるシテム、リ・サイクル。行為は次の衣を借りて、輪廻して、褒美サービスをやるうとて楽園の地にと辿り着けた、これが特殊ではなく通念だった……。

しかしクオリアは生まれた時から此処にいたのだった。

よって最初から俗世など知らない、俗世など、他人事のようにしか理解し難いことだった。

(また、『お話』、するしか……ないのね……)

クオリアは父である大司祭と別れた後、庭園にある、蔦や木で作られていたブランコに乗り、風や動力で揺られて夢見心地になっていた。ゆつくりと落ち着き昼と夜との間にだけ訪れる、まどろみの夢、白昼夢デイ・ドリームへ……揺りかごに揺られて眠っていった。

(さあ私の呼びかけに答えて……『シンヤ』)

……

底行かず浅い眠りだった。『仕事』を終えた後はいつもこうだった……安眠ができないという。

人をひとり『天送り』にしておきながら、深きよい眠りを得ようなどとは。

「やっと見つけたわ……」

崩れかけていた廃舎があった。薬品会社だったのか学び舎だったのか、整然と棚や机といったものが、角がとれて損傷激しく老朽化しているもののそのままの形で残されていて、小物は無いが、瓦礫や黄ばんだ袋、空き缶、壁にはこびり付いた得体の知れない粘着物などがあつた。生物のいる気配はねずみ一匹感じとれなく、隙間風はあるはずだがこれも感じとれなく、温度変化のない空気が滞留している。

そのため、2人の存在の方が特異だと、廃舎の時は傍観していた。

片隅で真也は冷えた床に座って休んでいた。しかし起こされて、立ちほだかつた少女、最後に見た記憶のなかの成とは同じ格好の、酷い顔をしていた成を、見据えていたのだった。

「団長をよくも……」

成の上げた片手の先には、きつくナイフが締め握られていた。ブルブルと震えながら、瞳はしっかりと真也を捉えていた。迫る成へ抵抗しない真也、振り下ろす前に成は罵声を浴びせるしかなく、続

いていった。

「あなたは卑怯よ！ どうして避けようとししないの……あなたは何、まさか人（ヒト？）ではないの？ サイボーグ？ アンドロイド？ ギミツク、お化け、怪物……？ 外道ね！」

思いつくまま暴言を吐く成の挑発に真也はそれでも便乗してはこない、まるで違う世界だと眠たげに答えていた。

「死んだ所で、また次へと生まれ変わるだけだ。鍛練と業を積み重ね、身体はつくり替えられ、時々休み、そしてやつと『楽園』に辿り着く……苦しまずに死ねればいい、どうせ、『繰り返し』だけだから」……

『恐怖』を失った者は、同じことを唱えるのかもしれない。死を恐れない。

成は怒りのなかに『悲しさ』を注がれたようで、混乱していった。両者は上手く融け合うことができず、目から飛び出してしまうていた。それが『涙』というもので、手から抜けて落ちてしまったナイフの上にポタポタとしずくとなって滴っていつていた。

（どうしてそんなことを言うの……私には解らない……）

膝をついて、真也を憐れと、成はそんな風に思ってしまった。2人の間にズレを感じて、今はどれだけ話し合い急いでもお互いを譲るつもりはないのだと、考えただけで悲しくなっていた。

（解ってはいけない……ううん、きっと解りたいよ……）

怒りは何処かへ……悲しみによる中和か、薄れていつていた。真也の方は相変わらず眠たげで、服に砂や泥など付着してもいいし自分を襲いたければどうぞと、横になって無防備に寝出してしまっていた。この態度には成も困り、とにかくと目をこすって涙を拭いていた。

「『知る』ことは、できないの……？」

置いて行かれたようで立ち尽くす成に、真也は黙っていた。眠りに入ろうと、または入ってしまったているのかもしれない、動きがなかった。

「あなたがどうしてそうなったのか、知りたい……」

……一度芽生えてしまった好奇心は、花が咲いてしまっていた。

「どうぞ」

トーン変化のない声が、成の行く先を案内していた。「え……？」
「眠ればいい」

訳がわからないうちに、成は突然、眠気に誘われ、倒れていった。ちょうど真也の隣で寄り沿う形となっていた。

浅い眠りは深い眠りへ、ノンレムからレムへ、同じ夢を見ることになるのは、約2時間15分後だった。

シュセンド・4 (後書き)

『レנטアルの思想』について

参考書：『「わかる」と「納得する」 人はなぜエセ科学にはまるのか』

松井孝典(著)より

自然科学者(著者)と宗教学者と哲学者が対談しています。

レム睡眠＝REM睡眠。急速眼球運動を伴う睡眠、この期間に覚醒した場合、夢の内容を覚えていることが多い。反してノンレム睡眠。入眠時にはまずノンレム睡眠が現れ、続いて約2時間ほどレム睡眠に移る。

シユセンド・5

成は聖堂の身廊にいた。

上部、左右を見渡すと、自分がとても小さく思え畏縮してしまっていた。半円アーチが載った柱が並ぶ側廊と側廊に身廊は挟まれており、壁ではなく廊は9本ずつの柱で仕切られていた。標準的な3廊式バシリカ教会堂らしく、奥行きは長くて、もし端から端まで走り切るといっているのであれば大変と時間を要するだろうと思われた。

側廊壁面には名の知らない肖像画が天井近くに並べられていて、成が見上げて鑑賞しながら廊を突き進んで行くと、通り過ぎて行った後追いで絵人物の目玉は成の方を順番にきよる、と向いていった。成は全然気がつかずに、音の無いこの世界に慣れてしまえばと、歩を止めずに道に沿って歩いて行っていた。

成は心持ち出口を探していた……ついに見つける、祭壇とは反対側、恐らくは拝廊、司祭が痛悔を聞くための台が置いてあり右手側には銀の聖水盤があつて、その向こう側に両開きの扉があつた。神聖な空間は成には場違いですぐに此処から出て行ってしまいたいと願わさせていたのだった。

早速と扉を重く、片方を開けてはみた……だが、成は躊躇してしまっていた。

まずは暗がりと……漏れてきた蒸した熱気だった。

(何コレ……)

反応した目は細めてしまつて扉を開いてから出遅れた成だったが、我慢してなかへと身を運んでいった。蒸し暑さは持続し扉を閉めると風も感じなくなり、より一層暑くなつてしまつて成を苦しめていた。

（服脱ぎたいなあ……でも、我慢、我慢）

ぺつとりとくつつく汗や衣服のことから興味を逸らせようと、辺りを観察し始めていた。暗いので少しばかり目が慣れるのを待つて、脳は情報を収集している。教会だと思ひ込んでいた成だったが、どうやらすっかり違う所へと迷い込んでしまつたらしかった。

中央に円形ステージがあり人が密集している、目立つのは裸で大太りの男で、下半身も露出がぎりぎりだった。男の周りには細身だが柔らかそうな衣を着た男女、種族も違えば年齢も違い、襪はくを着ている者ばかりかと思えば身分を表す鎧を纏つた者も交じつていて、楽しそうに酒や肴をあおつて騒いでいた。ぱつと見れば、羽目を外し過ぎた宴会にも見えていたのだが。

「え……？」

成の目を疑うような光景がフラッシュしていった、まだ幼い金髪の子どもが大太りの男の太い腕に軽々と持ち上げられていた。

聞いたこともない言語ではやし立てられて、熱気に包まれて、Pと先に書かれていた札が大きく子どももの肌の上に乱暴に貼られていた……これは。この、『宴会』は

競りである。

「んな……」

成は度肝を抜かれて固まり、動けなくなつてしまつた。麻痺した

頭で時だけが悪戯に過ぎていくようだったが、関係はなく展開は滞りなく続いていた。

ステージを囲む観衆は各自好き勝手に数字、金額を叫び、沸いた熱気が治まりかけたとすれば札のPYの文字横に決定した金額を殴り書き彫られていった。競りにかけられていたのは子どもだけではなく、子どもが別の男たちに引つ張られてステージから降ろされていった後には、骨角ばったガリガリの女が這い蹲りながら競りにかけられていた。そして先ほどの子どもと同じく価格が決まると降ろされて、また子ども、今度は女の子も、珍魚、生物だけでなく、保存のためにと液体に沈められていた臓器や脳、犯罪歴はなく死亡が確認されていない綺麗な身分、個人的情報の詰まったナノチップなどが売られていて……金額は正規など疾とつの昔に無視で自由にと破格的に上昇していった。

成り行きを見ているしかない成の体に気怠さがついてきていた。拒否、または場から去ることを忘れた成は、気絶してしまいたかった……だが、とろりとしてきていた乾き目に、次に競りかけられている『商品』が飛びこんできたのだった。

人型で手首から先だけの、部位だけが売られていた。台に立てられて格好のついたそれには、ゴールドの時計が着けられている。僅かな照明に反射して光り輝き、見る者を虜にさせていた。登場した途端に唾を飲み込んだ衆は一斉に拳手をして金額を叫んでいた。「×××××PY!」「××億PY!」木槌を持った司会進行管理者オークシヨニアは、鋭く様子を窺っている。

(あ、あ、あの金ピカ時計……ああ、ああああ……!)

成は信じられなかった。時計に見覚えがある、それもそのはず、

生前に団長が愛用しており特注で作ってもらったという、宇宙にひとつしかない物だからだった。昔、団長に尋ねた時に成はそう聞いていて装飾など見間違えるわけではないと自信があった。

「そんな……じゃあ、あの『手』は……」

これまでの人生の苦労を表現したかのように、ごっごつとした、いびつな『手』は『手』だけで、時計が掛けられていたからといって団長であるとは限ったことではない、だが、成は思い込んでしまっていた。あれは 団、長、だ！ 強く思い込みは成を捕らえて行動を起こさせていった。

「あああああ！」

顔を覆い、胸を締めつけ、呼吸苦しく、熱を帯びていた。こうしている間にも競りにかけられていた価格は上昇し、どんどんと金額は大きく手がつけられなくなっていくだろう、と、成は焦り出していった。

団長の『手』と時計は場にいる誰の手に渡るといつのか。物欲にたかる連中。それが誰であろうと成は絶対に許さなかった。

「×××億PY！」

成は拳手をする。手持ち金など一銭もなく、それでも成は手を上げて金額を提示していた。だが息つく間もなく金額は上乘せされて、入札は終わりを見せてはいなかった。成はまた叫ぶ、「××××億！」また入札は別の誰かが乱入していく。

歯止めのきかない滑車が回るが如く、成は飛び交う言語と金額に必死に食らいついていこうとしていた。入札金額が接戦へともつれ込む頃に、成は何度目かになる拳手をしようとして、手を上げかけ

た、まさにその瞬間を狙った者が背後にいたのだった。

成の腕を掴んで停止させた人物が低く、言葉と息を　吐く。

「やめる。金も無いくせにもし落札してしまつたら……お前、命どころか魂ごと売られるぞ」

忘却で消されていた彼……真也だった。「う、うう、う……」項垂れて、成の手は力を失い意志は砕けていつていた。下ろした後は、沈下し地面で塞ぎ込み涙でまみれていた。真也の言うことが正しいと、頭では理解しつつも納得がいかなかった。

地に伏した成を真也は立って見下ろして、……息を吸って振り返っていた。

「159兆PY!」

成は真也の大声を初めて聞いていた。驚いて成が真也を見上げると、手を高く掲げていた真也が堂々と入札金額を叫んでいた。観衆は揃いも揃って真也の方に注目し、どよ、とどよめきが走って退いていた。億単位だった所に桁違いの乱入者、異質の感も至極当然である。

木槌は叩かれていた、最高落札者を決定した合図だった。

「予算内だ」

平然と、真也は言つてのけていた。団長であるのか不明の貴金属付き『手首』は、真也に所有の権利を渡して幕を閉じることになつて、続行、オークションは、品のある限り半永久的に繰り広げられていつていた……。

紙幣が上から降ってきていた。成は泣きながら空を見上げていた。

「どつして……？」

お金が無いと、助けられないなんて。その成の疑問には、答えが導き出せなかった。

……

成の嗚咽が止まり一時間が経過していた。飽きずに進行していた競り、オークションは、一際光彩を放つ『品物』を用意していた。それは、人魚を彷彿とさせる女と鉱物で、鉱物は2000グラムの輝岩石マコウだった。両方がセットになって競りにかけられていた。

マコウはひと抱えほどある真空透明ケースの箱に入れられて保管されている。膝の上に載せて女は微笑み、純白のスレンダーラインドレスの先から伸びた足が細く美しかった。揺れる波の髪は長く、毛先まで黄金に輝いていた……。

商品名は、クオリアと輝岩石マコウ。傑出したもの同士は、反発することはなく非常にバランスがとれていた。

クオリア。女の名前だった。

熱気が、新しく生まれ変わっていた。沸点を超えた蒸気は見えないが明らかに商品が披露される前とは質が異なっていた。是非欲しい、我が物にと挙手は下ろす間を与えられず、群集はオーバーヒート、焼き焦げている。動作不良となる寸前にまで達した者の数は増加していく、これはひとつのエネルギーなのか、集団によるエネルギー。狂っている。

価格の規模が違いすぎた、天文的だった。手が出せたものではない、指を啜えて無為無策の不甲斐無さを味わうしか程度がない。呆

れていた成は、真也の横顔を見て驚きはつとした……。

とても悲しげな瞳。これも声と同様、初めて見た衝撃だった。

「何故そんな顔をするの……」

成は聞かずにはいられなかった。

「手が届かない……」

真也がぼつりと、こぼしていた。

視線の先にはクオリア。真也も成も、見ていただけだった。

長々と不断のオークションは値と落札者を喜ばしく決めて、クオリアと鉱石は見知らぬ素性の者にと引き渡されていった。「クオリア……」真也の漏れる声に成は。

くおりあ？

首を傾げて成は正体を知りたがっていた。

真也が成に見せてくれた白昼夢は、天国と地獄……の、ほんの片鱗だったに過ぎる。

……

寝そべって目を覚ました真也に、成のナイフが突き付けられていた。

首元で光る刃先の向こうで、潤む成の目は、真也からとても離れられそうになかった。恐る恐る成は自分の考えていたことを確かめたく、真也に問いただしていた。

「『クオリア』を……手に入れたいの……?」

成の問いは確信を突いていた。真也はまぶたを閉じた、それが素直な答えだった。

「クオリアを……楽園から連れ出すんだ。クオリアが望んでいる。

クオリアが、俺に呼びかけている。『私を此処から連れ出して』…

…チャンス機会は一度だ、千年後に開かれる大宇宙オークシヨン」

「え？」

「クオリアは大事に育てられている。クオリアは知っている。自分がどうい道を進むのか。食肉用の鳥を肥え太らせて旨くするように、クオリアは」……

真也がかつて『シユセンド』としてこのアーノルドの星に立った時。まだ不慣れな手腕の、真也の不安を取り除いてくれたのはクオリアの……慰めだった。

『あなたは悪くない。悪いのは……』

聞こえのよい声は、透きとおりによく響いていた。
声色は変わる。

『金よ』

……

クオリアは、真也に殺人の手ほどきを教えてくれていた。制御のきかない並み超えた能力の使い方も、教わっていた。業についても、教えてくれていた。

クオリア、我が師。

真也はクオリアにすがって、幼少時代、学びはひと筋の道をつくり上げていった。真也が何かのきっかけで悩み立ち止まりそうになった時に、真也は相談を持ちかけ、クオリアはいつも優しく受けてくれて真也を包んでくれていた。しかし時折、厳しいことも言っているのけていた。

『助けて、クオリア。僕は自分は何なのかを知りたい。教えてほしい、僕は何処からきたの』

幼い彼は誰も答えのくれない問いを、クオリアに託して待っていた。

『知らない方がいいこともたくさんあるのよ。宇宙の始まりが何処かなんて、あなたが知る必要はない』

思いもよらないクオリアの回答は、真也には怖かった。

『でも知りたいんだクオリア……でない僕は、……死にそうになる』

好奇の蟲は彼に巢食っていたようで、助けてと懇願し苦しさからの解放をクオリアに求めていた、だがそれでもクオリアの信念は曲がらず、真也に衝撃しか与えなかった。

『だったら死ねばいい。知られるくらいなら、死んでくれた方がいい』

クオリアの去ろうとする気配を察してか、真也は慌てて引きとめていた。『待ってクオリア！ ごめん……』クオリアは、……ワラツタ。

『私のために、人を殺して。“シュセンド”』

世界は閉ざされていた。

……

「大宇宙オークション」……」

成の体は強張っていた。そんなものが千年後の未来に、と、信じ
るには時が遠すぎて想像を超えていたのだった。夢の続きを引きず
っていたのか、真也は成ではなく空中の何処かに己の進む道の確認
をとっていた。

「クオリアは、それに出品されることが決定している……」

一体どれほどの金額が動くのか。

「俺は金を稼ぐ。この星の連中を全て金にかえてでも。闇の取引の
方が、高く値がつくんだ……光の者を、殺す」

今、成の前にいるシュセンドの目は、死んではいなかった。ナイ
フを持った手をとくに下ろしていた成は真也の胸ぐらを掴み、「
……させないわ、阻止する」と訴えていた。「あなたがクオリアの
呪縛から解き放たれるよう、願ってる」

意志はぶつかり合い、片方は片方を追いかけていく。

成は真也を追いかけて、テレキネシス能力を持つ真也は成から何
処までも何処までも……逃げていった。

シュゼンド・5 (後書き)

クオリア：

心的生活のうち、内観によつて知られうる現象的側面のこと、とりわけそれを構成する個々の質感のことをいう。日本語では感覚質と訳される。簡単に言えば、クオリアとはいわゆる『感じ』のことである (Wikipediaより)。

シユセンド・6

司祭は説いていた。万物は流転し、業は保たれたまま、『器』は滅びと再生を繰り返す……と。

悔い改めなさい、癒しを請いなさい、私の手をとりなさい、余計なものは捨ててきなさい……

注文の多い司祭は、聖徒に向かってそう投げかけている。そして次のように謳っていた。

可愛い我が娘、クオリアよ。お前は千年後、神になる。

それまで楽園で過ごすのだよ、クオリア。汚れなきように。

クオリアは知っていた、外の世界を。金にまみれた愚かな者ども

……と。

滅びていく……。

……

衝撃は別の所にも踏みこんでいった。

せつかくのデートを事件のせいで台無しにされ、最低な日を終えてボロのアパートに帰ってきていた直人は、数日、空虚だった。気持ちを切りかえようとスーパーで買った特価のジャ・ボン（ナスが改良ではなく勝手に進化しハジけて酸っぱくなったもの）豆腐で無理やりにコサイン料理を作ってみたものの、「これではタンジェントだ」と自己評価を下していた。アクラムでは通用する。ちなみにサインは卵を使ったトロピカル料理だった。

直人が細々と部屋でひとり食事を終えて食器を片付けようと立ち上がると、突然に嫌な予感がしていた。それで直人は、ひとまず玄関の方へと何気なしに移動したのだった、その背後だった。

天井を突き破って、『隕石』が落ちてきたのである。「ぬっん！？」

振り向くと同時に破壊音と轟風で直人は吹っ飛んでしまった、何が起こったのかが判らないでいた。玄関先まで飛ばされて、しかもドアをも体当たりで巻き込んでいた。蝶番のとれたドアは無残にも直人のせいで内側から折れ曲がり、鈍い音をさせて倒れてしまっていた。

「何なんだ？……」

腕や肩などぶつかった部位をさすりながら、直人は『隕石』を確かめようと身を起こした、だが、外へとドアごと放り出されていた直人の正面に軽装で長い金髪の少女が外の階段を駆け上がって来て立ち、直人にいきなり真っ向から謝り出したという。「ごめんなさい！」

急に頭を下げられて、戸惑っていた。「何なんだ？…… W H A T？、何は繰り返されていた。見れば解るだろう、そう直人は改めて『隕石』に刮目した。すると、激しく舞い上がった砂煙のなかから、人のような影が段々と現れて直人は仰天、近づいて驚嘆していた。

「人が落ちてきたのか！？」

その通り、落ちてきたらしいのは少年で、気絶していたため動い

てはいなかった。いや、そもそも服は少々破れてはいるが、無傷だった、普通に寝ているように思っていた。「……………」

直人は、少女を見て難しい顔をしている。少女は名乗っていた。

「成といいますが、そっちの彼は連れです、ごめんなさい……………見境なく追いかけてたら、彼、爆発して飛んで行っちゃったの……………怒らしちゃったのかな……………」

言っていることが滅茶苦茶だった、直人は理解に苦しみ目頭を押さえてもう一度成を見て言っていた。

「とにかく、部屋で待っていてくれ……………損傷が酷い。アパートの大家さんに怒られてしまう」

怒られるだけで済まないと思われるが……………直人は気をしっかりと保っていた。

直人は借金をすることになった。大家さんとの詳細は秘密である。金の算段は終了し一段落をつけて、直人は穴のあいた部屋へと帰ってきたのだった。「ただいま、待たせたな……………ん？」閉まらない玄関をくぐってなかに入ると、天井など綺麗に片付けられ掃除までされ、台所から味噌汁の香りが漂っていた。「おかえりなさい」

成が台所を拝借し、簡単な料理をしていた最中だった。鍋は2つあり両方はコンロにかけられていて、ひとつは味噌汁だがもうひとつは何かが煮えていた。直人は立ち尽くしていた。「……………」

「あ、すみません……………とりあえず、彼、縛りつけていますがまだ寝てますので……………できたら、見張っていて下さると助かります。暇だったんで、台所を」

「あんたらどういふ関係なんだ。もう限界だ、わけを話せ」

言った通り、直人は我慢もそこそこ、成に詰め寄って聞くに達していた。「はい、その」成は手を止めず、経緯を説明するにはまず何処からと言葉を探していた。

「初めまして、私は成で……彼は……『シユセンド』って、知ってます？ 彼がそうなんです、闇の取引市場の働き屋」

直人は真也へまた目を皿に、「こいつが!？」と反応していた。真也は後ろ手を電源コードで縛られて、横になって寝ていた。遠隔の動作能力がある以上、縛りつけても気休めにしかならないだろうということは、成も承知していた。

成はこれまでのことを直人に説明する、隙間風が半端なく凄まじい部屋、明日から働きを倍以上にしなくてはならない借金を背負った直人。現実には甘くはなかった。

「クオリアあ……？ 何だそりゃ、女神？」

反して、現実離れた話に直人は半信半疑だった。

「私は彼に育ての親を殺された」

成の目は厳しかった、……真也に近づき、頭を撫でてみたりしていた。

「許さないわ……彼を……」

瞳は色濃く、真也を見つめている。髪に触れるその仕草は、言っていることとは矛盾しているようだった。直人は咳払いをひとつ、多い疑問や謎を整理していった。

「それはそうと、おかしな話だ。千年もこいつ、自分が生きられるとでも？」

「肉体は滅びても業は消えぬ、新たな体に魂宿され、輪廻を繰り返す」　本当かしらね……？」

少なくとも、真也はそう思っている。実際にそうであれば、千年でも万年でも精神ひとつに地で何度でも生まれかわりを体験し時を過ごすことが可能であると言える。これを転生、或いは肉体レンタル、或いはハツチャケぶつとびワールド全開、ということもできよう。信用はできなかった。

成と直人が通夜の晩のような沈んだ顔をして待つっていると、その内に真也は目を覚まして起き上がっていた。「おは」成がおはよう、と言う前に、真也はコードに両手を巻かれたまま素早く立ち上がって逃げようとしていた。だが直人の反応の方が速かった、余裕で直人は真也の逃げ道を塞ぎ、ドンと押すと真也はいとも簡単に倒されてしまったのだった。撫でつけていた髪も乱れることなく直人は真也を見下していた。

「俺のが上なのか。だったら大人しくしてもらおう」

アクラムでの至上主義は、存分に使えて発揮されそうだった。「お前に味噌汁を食わしてやる」取り押さえられた真也は抵抗することができなかった。

食卓にご飯と具のない味噌汁、鶏卵ではない卵焼きが並んでいた。はて何か一品足りなくないかという疑問は冷蔵庫のなかにある、2時間後に完成するらしかった。無言で3人は箸をすすめ、味噌汁を食べたというよりは飲み終えた成は直人に、大家さんとは穴のあいた部屋にどのような折り合いをつけたのかを聞いてみっていた。始めお茶を濁していた直人だったが、「とりあえず『隕石』のせいにしておいた」と言っていた。とりあえず。「明日本屋へ行ってメンズ雑誌を買ってこないと……化粧用品も……大家さんの紹介だ、失礼

なきように「直人のひとり言は、成にはよく解らなかつた。直人は借金返済のために今後の生活が色々大変らしかつた。

「今後のことだけど……私、“クオリア”について情報がほしいから、他のシュセンドを当たってみようかと思う」

成が言い出していた。「シュセンドを？ こいつと同じ奴らを？ 直人が話をふるが、こいつと呼ばれた真也は黙って味噌汁をすすっていた。ちびちびと食していた。

「真也の言っていることが本当なら、誰かが知っているはず。クオリアのことも、オークションのこともね……」 「でも、どうやってだ？ 普段、隠れている奴らを？」 「これよ」

成がポケットから出した紙は、選挙ポスターだつた。「おいおい、勝手にはがしてきたのか、捕まるぞ」手持ちサイズに折り畳まれていたそれを広げて見せては、また畳んでいた。「構わないわ」成の目は真剣で、小さなことなど気にはしていなかつた。

「私の勘だけど、この大物政治家の首にも賞金がかかけられているんじゃないかって。予想」

腕を組みながら直人は「うーん」と唸りっぱなしである。「勘、つて……当てになるのかそれ」直人の心配など御無用で、成は根拠もなく自信で言い放っていた。「たぶん。昔から、天気とか当てるのは得意だつた」

「天気を当てられてもなあ……」

直人の苦笑いは止まらなかつた。真也は味噌汁をすすっていた、もうすぐ卵焼きに箸が到達する。

「……“輪廻”だけ。聞いてると、どうも宗教くさいんだよな。

ひとつ心当たりがある」

直人は思い出したことを口にしていた。「何ですか」成はひと足お先に食べ終えて、お椀を端に寄せながら直人の話に関心を向けていた。

「大宗教界クリウム、大司祭サンタメリアの教えだ。かなりキチガイな……いや、薄気味悪い連中で、何でも……信者は確実に、精神マインド操作コントロールされるって話だぜ」

「マ……」

考えて成は寒気がした。本当なのそれ、と身を縮こませていた。「噂だ……確かめてみたわけではない。俺の故郷に本部がある」

直人が捨ててきた星、惑星アクリム。競争国家、争いの絶えない星だった。故に、安らぎを求める者が多発していた。表では武器をふりかざすが、内では違っていた。そこにつけ込んで、奇妙な団体は猛威を奮うのだった、さあ我に身を委ねなさい、あなたに安らぎを与えよう……

戦いに身を置く戦士の胸元には、調和を示す円「図ノグラム」がぶら下げられている。

「行って確かめてみたいけど……お金が……」

成は着の身着のまま真也を追いかけてきてしまって、金が僅かにしか無かった。弱った顔をし、真也の方をちらりと見やる。真也は皿の上で山になっていた、焼いただけの『卵焼き』に突入していた。「別にいいけど」箸は止まらず、真也は残った卵焼きを綺麗に食べていっていた。美味しかったのだろうか、文句もなく表情もないが、成はホツと胸を撫で下ろして笑っていた。不味かったらどうなっていたのだろうか。

「そういえば……アクリム行きの客船チケットが低値でオークションに出品されていたのを過去に見たことがあるぞ。無論、正規のだ。

今でも旅行会社からあるかもしれない、あつたら、入札してみたらどうだ？」

『携帯こみゅ』シリーズのうちのひとつである愛用の腕時計、SH07を取り外して、成に預けながら直人は言った。「うん！」嬉しく成は受け取って装着し、使い方を覚えながらオークションを探し、参加申請、登録をしていった。「そういえば……」成は直人に忘れていたことを思い出して聞いていた。

「何だ？」「お名前、何でしたっけ」

何だそんなことかと肩を回しながら直人は胡坐をかいて寛いでいた。

「孫直人」

……

距離を線で表すならば、波は生まれ、時間が生まれる。
距離を点で表すならば、波も時間も無い。

点Aから点Bへ。客船は、ワープする。

……

成はドキドキと緊張高鳴る心臓と共に、脳へと送られてくるオークションの『入札情報』に集中していた。まだ成は入札していない、終了間際を狙うつもりだった。商品名は『93年宇宙の旅ドリームNONOKAと一緒に ゴーゴアウェイ』で、3泊4日プランの旅行だった。行き先は惑星アケラム、ほとんどが自由行動であり

開始値が5PYと怖いくらいに安値だった。

終了予定時刻が迫っている現在、入札数はその安さのせいなのか最終にドドドと入札ラッシュが待っているのか、0だった。成がこのまま自分のIDと商品ナンバー、入札額を告げればメディアを通して落とせるのかもしれないが、最後まで気が抜けなかった。「ぬぬぬ……」爆弾かもしれないスイッチを押すか押さないかで悩んでいるのに似ていた。

「そんな難しく考えるな……肩の力を抜け」

台所で洗い物をしていた直人が言っても、成の耳には届いてそうにもなかった。「うー」頭痛に苦しむ人にも見えていた。

「入札単位はいくら？ 相手は大概、最低額で押さえておこうとするだろ、それを逆手にとつて、下一桁をいじっておけばいい……」

脱走を諦めた真也は……スピードの遅い食事を終えて寝ていたが、成にひと声かけていた。

「????」

「だから」

やれやれ仕方がないと真也は身を起こして成の隣に移動し、成に駆け引き、競りのコツを教え出していた。直人はオヤ？ と温かく光景を見守っている。冷蔵庫のなかのものは、忘れられていた。

オークションは終了1分前に他の誰かが入札し成は冷や汗をかいて焦っていたが、「落ち着け、だから……」と真也の冷静な判断と的確な助言のおかげで、延長はしたものの無事に落札は成功していた。

「やったあああ！」

喜びを全面に表し成は真也に飛びついていた。「うぐっ……」

シユセンド・6 (後書き)

名前で遊ぶ作者(いつもだ)。

現在の価格に応じ、最低限上乘せする必要がある金額をオークション側で予め設定してあるのが『入札単位』らしいのですが、これを、入札単位の整数倍で入札することと勘違いなさっている方が多いため、結構トラブルになっているようです。日本と違い外国じゃバンバン競りは行われておりますが、下一桁が細かくなる方が普通の認識のようです。その方が面白いんですけどね。

シュセンド・7

アクラムへのチケットは2枚でセット、1枚で2名が旅行可能であるらしい、合計4名が行けることになる。そのため、支払い手続きを終えた成は、直人に頼んで行く星までついてきてもらおうと考えていた。

「あなたにも是非ついてきてもらいたいんだけど……故郷だし……だめかしら？」

直人はゆっくりと頷きながら答えてくれた。「いいよ、いい機会だ……」心中、直人には複雑な糸が絡みついていて、真っ先に浮かんだのは、恋人のセイラのことだった。

『私のことより、事件の方が大事なのね』

頭の回転をいつでも鈍くさせていた。セイラの言葉はざっくりと直人に斬り込んでしまつて、回復には相当の年月がかかりそうだった。4名まで行くことが可能なら、成、真也、自分と、セイラもどうか……と思つたが、直人は首を振っていた。

あまり自分の故郷のことを知られたくはない、それがあつた。

「ありがとうございます」

成は直人の前で、にこにこ笑顔を絶やさなかつた。

朝が来て、ベランダから差し込む光で起こされた真也に、新聞を読んでいた直人が食卓の向こう側から挨拶をしていた。「よう。早う」成は外へ出ていたらしく、アパートには2人しかいなかった。ドアの無い玄関からダイレクトで吹いてくる風だが、焼き肉のおいがしていた、近所の何処かで朝からジュウジュウ焼いているに違

いない。

「味噌汁でも食べ。成が用意してくれたから」

台所付近を指して真也に言っていたのだが、まだ寝ぼけていたのか真也は機能していなかった、固まって目を半分、閉じかけていた。

「これからのことだが、俺とお前と成、この3人でアクリムへ行くぞ、連れていくからな」

真也はぼんやりと視界を開けている。壁際にもたれかけていた。

「何故……」それだけを言うのが精一杯だった。

「喜べよ。そこにお前の愛しい“クオリア”がいるかもしれないだからな」

真也は、寝たら会える夢に戻りたいと、半開きの目で訴えていた。

……

惑星アクリムでは、中央集権国家ヨシユアと隣国ヘンゼルが対立し、激化して規模は世界的に拡大しつつある。それを知ってか知らずか宇宙船である客船は、平和にも予定通りに出航していった。

「ようこそ！ 宇宙船はあとミラクル号へ！ ご案内させて頂きま
す、NONOKA301号でえす！」

元は家庭用に大量生産されていた家庭内労働者ロボットトウイーニー「TWENNY」は楽しそうにピースサインを傾けて、自己紹介を始めていた。ピンクと白色のエプロンドレスを着ていたメイドロボットの彼女は自らをNONOKAと名乗り、ツアーに参加していた観光客全員に呼びかけていた。成が競り落としたオークションとはまた違った所で同じ3泊4日プラン『93年宇宙の旅ドリーム NONOKAと一緒に ゴーゴーアウェイ』は出品されていたようで、成

たちの他にも数十人が同乗していた。

衣服でかなり誤魔化されてはいるが、廃管パイプで組み立てられ可視光硬化樹脂に塗り固められた体躯ボディをしていた。手先は細かく設計されてはいるようで、器用に指でキツネを作ったり関節を外して遊んだりすることができていた……かもしれない。開発製作者の遺言により、顔は当時グラドルの 谷 織似にするよう徹底されていた。しつこく後代にまで受け継がれている。

船は外見からドーム型、真っ白な機体にはみ出しそうなほど元気よく黒の筆記体で『は・あ・と』と書かれていた。触ると柔軟性に富み、上層に開いていた穴からは蒸気が噴き出していた。は・あ・とな割にはハート型でもハートフルでも何でもなく、どう見ても肉まんだろう？ と言われてしまう間違いだらけの宇宙船だった。

円形のステージがありラウンジがありインカフェ（此処ではネットカフェとは言わない何故ならネットだけではないためそしてインドア派の皮肉も込めた意による）も充実し、星を眺めての移動時間には事足りて客人は皆満足をしていた。

「ちょっとPRさせて頂きます」

NONOKA301号はステージの上でテンションが高く、そのためか緑色に発光していた。PR、パブリック・リレーションズ。情報だけで浮かび上がった司祭が出現した、顔面はイリジウムと白金の合金製の仮面で覆われ、柔らかな鎧を纏いオーロラフレア・カーテンを模したベールに全身は包まれていた。仮面の装飾デザインは猿が笑ったようだった。

「我が大いなる父、サンタメリアへ。教えが、あなたを救います…

…」

信者が暗誦している諷經ふうきんのBGMが流れ、異様な空間ができていった。成は気持ち悪さを覚え、逆流性食道炎を疑う胸やけがしていた。

「これが精神操作……」

横で直人は大人しく腕を組んで、終わりを待っていた。

「気をしっかりと持てば大丈夫だ。耳を貸すふりをして……耳を塞げ」

無茶なことを平気で言っていた。成は静かに目を閉じて、寝てしまおうと意識を外界から引き揚げていった。

……

私は、彼が憎い。滅ぼしてやりたいほどで、何度も夢のなかで彼の首をとろうと手にかけて。でも、憎しみ、……それが何だと言っの？

彼を殺した所で本当に私は『納得』をするの？ ……

成には、真也の顔が忘れられないでいた、あの、許しを請うような可哀そうな眼差しは。

成には、彼を殺せない。情が邪魔をする……

殺せないならば、生かそう、生かすのならばと……

「彼を、クオリアから解放する」

邪魔な存在クオリア、そのせいで真也は、と。「許さない、悪魔」

客船は、予定通りにわざと遠回りをした緩やかなワープを終え、船の集まる港に着いていた。

……

西部都市コガネワールド。中流の階級たちが住む所である。彼らに課せられた納税は、ひと商品、1所帯につき70%。働かなければとても生活は成り立たないが、納めた税はきちんと目に見える形で還元されていた。見た目には華やかなこの土地、外来からの異星人をサンバのような踊りとカーニバルらしい盛り上がりで歓迎していた。

船から降りると早速、繁華への誘いである。

「うつとーしー」

体鳴楽器、膜鳴楽器、弦鳴楽器、気鳴楽器、電気楽器とあらゆる楽器の音がやかましく、成は耳を塞いでしまっていた。宇宙船の船着場から離れて行っても、残響は離れてはくれず苦しんでいた。

「すぐに慣れるさ。さてと……それじゃ、東へ逃げようか。滞在時間は4日しかないからな。1日も無駄にしたくないだろう」

直人は先頭に立ってタクシーを呼んでいた。タッチ式の送信機に手を触れて、IDらしきナンバーをぼそぼそと伝えていた。口頭だと他人に知られるのではと思われるが声紋などで照合しているので心配はいらなかった。希望の行き先を東にと、地名を告げていた。「りっちー」成が茶化すと、「大丈夫だ、この星は移動手段には金が要らない」と直人は教えていた。

直人はさすが、この星の良き“案内人”だった。

東へと移動しながら、昼食をとり休憩をしていた。タクシーの運転手は車内の掃除を始めて、それを店外に見ながらメニューへと視線を移して直人は、カウンター越しに店員を呼んでいた。

「ハンバーガー3つ。トテポはMを2つ。ドリンクはフリーで」「承知ツカマツルツチャ」

注文に対し店員は音声認識型だがこれは相当古い型の雷人口ボツトで、訛りがきつかった。メンテナンスを普段しているのかと余計な世話を焼きたくなってきてしまうだろう。

「此処の老舗はいつ来ても変わってないな。やっと導入した店員があれじゃ、客も寄りつかんだらう」

時間的に言えば客で席が埋まってもおかしくはないのだが空席が幾つか見られ、成と真也は顔を見合わせてまた直人に目を向けていた。

「そう？ 古風も、親しみやすくもいいけどな。可愛いじゃない」

「なるほど、女の子には受けるわけか……真也、起きてるか？」

直人の呼びかけに対し真也は「ああ……」とだるそうに声を上げていた。

「まさかまたクオリアの夢でも見てんじゃないだろうな」

「やめてよ」

成の顔が曇ったと同時に注文した品がトレーの上に並べられて、カウンターに置かれた。

「さ、上階へ行くぞ。何階へ行きたい？」

トレーを持った直人が気分を変えて、2人に訊いていた。

「何階まであるの？」

成だけがきよるきよると周囲を見回して興味津々だった。成たちがいるのは玄関を入ってすぐだったが、ここを拠点に9方へとルートが分かれていた。先には床が水平に動くエスカレータ、簡易用にと貨物用フォーク型リフト、遠方へ行くために時間消失の概念を実用化した転移装置があった。

「上空183階、地下366階、前左右斜方各45階までだそうだが地下は日ごとで三季が堪能できるし、上空は外の景色が展望できる。左右斜方7ルートは各レジヤ―施設にも繋がっていて、AAルートなら焼きたてパパン（パン）工房が……」

「あーもう何処でもいいけど！……お勧めは？」

成が聞くとは何故か直人は……何かを思いついたらしく、うにゃありと口の端をつり上げていた。

「MOルート118階。カジノがある」

直人が言った通り、MO 118階、通称もう（どーでも）いやフロアはゲームコーナー、賭博場^{カジノ}だった。奥に行けば行くほどに温度は上昇しイセイジンでこった返していた。ヒューマノイドだけでなくアニマリアンにノルディック……自分より身長高い生命体には成は怖くて直人の背を見失わないよう、懸命に追っていた。真也を置いて行かないようにと手を繋ぎながらだった。ビリヤード、筐体、ピンボールにルーレット、TCGデュエルスペース、雀タク。強化ガラスで仕切られたなかにはスロットが整列してあった。「ふえ〜」成はため息をついて汗を拭いていた。

「おわ……直人じゃねえか、このやろっ」

混み合うなかでいきなり声をかけたのは銀髪のおレンジ体、直人とは幼馴染だった雄で、ムサシガワと名乗って成たちに自己紹介をしていた。「久しいなムサシガワ。元気してたか」直人が返すと、ムサシガワは肩をばーんと叩いてふざけていた。シャツの袖を七分に捲りネクタイでキメていたムサシガワは、オレンジ色の指をパチンパチンと鳴らして歓迎している。

「こっちの台詞だけカタブツ。何年ぶりだと思ってんだ、一切連絡なしで……まあいい、ゆつくりしていけよ。連れさんもいるみたいだし。俺のお薦めは……あっこ（あそこ）」

鳴らしていた指でさした方向の先を見ると、そこは……

グリーンフェルトのテーブルで、2名の客とディーラーがカードゲームをしている所だった。

「“パバター”さ」

ムサシガワは直人たちを連れて、席へと近づいて行った。「ようアキノ。いっちょ遊んでやってくんない？」気さくに話しかけ、相手は陽気に答えていた。「おう、いいぜ。誰がダ？」片言で黒首黒袖のディーラーは、成たちを招いていた。「可愛い子いるじゃん」
「ちょうどひとり足りてねえし、来なよ。なあ」ひとりは体格の大きい毛質の濃い男、ひとりは地味にキャップを被った若い男だった。

「わ、私ですか？」

手招きされて、成は慌てて直人とムサシガワにヘルプを求めている。だが直人たちは微笑みながら「大丈夫、1回だけだから。怖くないよ」と手を振っていた。「うう……それじゃ」成は諦めてテーブルにつき、ディーラーがカードを配るのを不安そうに眺めていた。

パバテールとは。1から13（K）までの数字と一緒にハート・スペード・ダイヤ・クローバーと4種のマークがそれぞれ描かれた（要するにトランプ）全てのカードをプレイヤー全員に均等に配り、親を決め、親から順に手札のカードを出し重ねていき、手札を使いきったら勝ちという対戦型テーブルゲームである。

カードは3が一番弱く、続いて4、5、6……J、Q、KときてA、2の順で強くなっていく。場に出したカードより強いカードを出していかねばならず、また枚数も、同数字で2枚同時に出されたら次は2枚、3枚同時なら3枚と出さねばならなかった。『革命』という、同じ数字4枚を同時に出されると強さは逆転し、2が最弱、3が最強になってしまふという。強いカードを出していくので、2を出されたら次はA以下で出していかなければならない。

順番がまわってきててもパスが可能である。出せるカードが無い場合や出したくない時はパスを使う。他にカードを出す者がいない場合は積まれていったカードの山は『流れ』で、止めたプレイヤーから好きなカードを出し、続行していくのである。

まずは手札となるカードをディーラーは成たちに13枚ずつ配り終える。ルールの確認をした。

「お嬢ちゃんのために、ローカルルールは無しだ。親もお嬢ちゃんからでいい。ジョーカーも無し、単純にやろう」

毛質の濃い男が鼻の穴をほじりながら配られた手札のカードを自分に分るように並べ変えた。他もそうである、持ち札をしっかりと把握し、戦略を立て、挑むのであるから。

「かけ金は？」「5ベッタ」「嬢ちゃんは」「え」

振られて成は直人や真也たちに困った顔をしていた。真也は考え
て、「じゃあ、5ベッタ。一緒」と適当に答えている。男たちは「
本当にいいのかよ」と臭い息を吐きながら笑っていた。

成たちにとってはP.Yではない通貨の価値が今ひとつピンとはこ
なかつたようで、男たちが何を言っているのかがよく解らなかつた。
仕方ねえなあと男たちは仲間内だけで楽しんでいた。

「それだけあればいいホテルに5泊は泊まれるんだぜ……まあいい、
此処ではベッタを使う。さあ心の準備はできたか、始めようぜ」

シュゼンド・7 (後書き)

パバテ-は造語。内容は『大富豪(関東じゃ「大貧民」かも)』。
Poverty「パバテイ」=貧乏、貧困

カードは全部で52枚、ジョーカー無し。成に13枚、ディーラー、毛質の濃い男、キャップの若い男にも13枚、手札は平等に振り分けられていた。さて此処からである。ローカルルールも無しということ、マークは勝敗に関係がなくなるのでこの際考えなくてもよいとする。数字だけに着目する。

成の持ち札は弱い順から、3が3枚、4が2枚、5が3枚、6が1枚、Jが4枚だった。素晴らしく弱い方に偏っていた。

(そ、そんな……最強がJ……)

つい顔に出してしまいそうなのを堪えていた。せめて1枚でもいいのでAや2があればよかったのにと、成は窮地に早くも立たされた思いだった。

(どうしよう……)

真也の方を向いた。真也は黙って成とカードを見ていた、特に表情は崩していなかったが、成は少し安心していた。何とかなるかもしれないと自信を取り戻していた。「えと」

スタートである。

「親はお嬢ちゃんからだ。好きなカードを出しな」

毛質の濃い男は成に顎でグリーンテーブルの上へと促していた。この男、悪気はないだろうが脇を開くたびに体臭が漂い、そしてよくしゃべる。口を開けるとまた臭いにおい、成とは向かい合わせで座っているが、鼻のきく成には真正面からの攻撃で気分を害していた、我慢をしている。

(くさい……つと、それどころじゃないわ、えーつとお……)
手札を改めて見直した成は、Jを4枚、手にとった。「かくめい
(レボ)！」　　ばさ。テーブルに第一投を仕掛けていた。カード
の強さをひっくり返せば勝機はあるだろうと考えていたのだった、
3や4を複数枚持つているのだ、負ける気がしない、そう考えたが
しかし。そう安易なものでもなかったのである。

「革命返シ」

成の次はディーラーの番で、華麗に8と描かれたカードが4枚、
並べられてしまった。カードの強さは、元へと戻った。「げ」

今度はしつかりと反応を示した、成はそんな……と激しく落ち込
んでいた。そんな態度と、後ろから見える成の手元のカードに真也
も半ば呆れ、直人は苦笑いをしていたが成は振り向かないと分か
らないでいた。「うう……」　　ひとりの手元で偏つていれば、あとのカ
ードも何処かで偏っていたのかもしれない。その可能性を考慮して
いなかった成が悪かった。カードの8は八八八八と笑っていた。

8まで重なったカードの山は『流され』て、親となったディーラ
ーは6を2枚、次に毛質の濃い男が9を2枚出していった。次にキ
ヤップの若い男がKを2枚出した時、成は肩に重みを感じていた。
6以下しか持ち合わせてはおらず、どう考えても出す隙がなく絶望
だと思い込んでいた。

(ふえーん……)

泣きそうになりながら、成はチャンスを待つしかなかった。

成はパスをし、Aが2枚、また『流れ』て、7が2枚、10が2
枚、Kが2枚出されていった。この時点で成は手持ちが9枚、デイ

ーラーが3枚、毛質の濃い男が9枚、キャップの若い男が9枚だった。弱い数字はほとんどが成のもとにあるため、相手方には強いカードが振り分けられていると推察している。

Aは出たがまだ残っている、2は1枚も見えていないので誰かが持っている、ではKは？ Qは？ ……

成の思考力は頑張っていた。成がどうかして親にならないと出せるカードはなかった。時間の問題で、成以外の3人で接戦にもつれ込むだろう、そう予測していった。しかし奇跡は何ことでもなく息を吹きかけるが如くにやってきた。

ばさ。

4枚のカードが視界に入っていた。全て2と描かれていた。

(え?)

成は驚く……目を疑っていた。声が反芻する。

「革命。『流し』て」

言われてディーラーは、山を退いていった。「いいかな」革命を披露したキャップの若い男は端横に結んだ口唇を湿光らせて、手持ちから3枚をさらに抜いて場に出していた……Qが3枚だった。成にチャンスが生まれたのである。

(う、嘘みたい……)

怖がりながらの、5の3枚を上重ねていった。次のディーラー、毛質の濃い男はパス、キャップの若い男も「どうぞ」と成に番を譲

っていた、パスだった。

成以外が皆パスだということは。「……」成は続けて3を3枚、無論、これより強いカードを誰も持っているはずがなかった。皆にパスされ成は安心して4を2枚、実は4はまだ2枚が場に出てはいないが例え2枚を誰かが所有していたとしても出せないわけで、ついに成は最後の1枚でフィニッシュを決めた、ダイヤの6を1枚、嬉しそうに放り投げて万歳をしていた。

「やったー！」

飛び跳ねていた。真也と強引にハイタッチをし、直人とも両手を叩きあつた。「えへへ！」成は調子にのってディーラーの傍へ身を寄せ手札を覗いていた。ディーラーが残していたのはAが2枚と5が1枚で、成が一番のりをしても残った3人でゲームは続いていたのだった。

「よくやったな。おめでとう成」

直人の前、配当された金額分を持って成はひとり大はしやぎだった。「これ換算するといくらになるのかな」「さあな」直人は適当に誤魔化しつつ、ビリヤード台付近で忙しそうに接客をしていたムサシガワを見て、彼と視線がぶつかっていた。ムサシガワはウインクをしていた。

成が去った後のゲームではディーラーがA2枚のうち1枚を出し、キヤップの若い男が次に手札を出し終えて2位に着けると、残りカード数が多かった毛質の濃い男は一度親となって怒涛の勢いにのり、勝ちになった。負けたディーラーは後片付けをし始めていた。

片言で黒首黒袖のディーラー、アキノという彼は片付けを終えて

トイレへ行こうとして立ち止まった、真也が両替機の傍で彼を見ていたからだ。 「御疲れ様」 「？ どうぞ」 「何で残ったAを分けたんだ？ 楽に勝てたものを」

真也が指摘していた。 真也は最後まで。 きつちりと勝負がつくまで、テーブルの上を見物していたのだった。 そこで当然と疑問に思う、勝てた勝負を捨てたにすぎないディーラーの彼のやり方に、一度訊いてみたくなったのだった。

彼は答えた、そして速やかに去る。

「お客様に満足シテ頂クのが『仕事』^{フロ} デスノで……」

すっかりと日は暮れて、アクラムにも夜は訪れる。 成たち2人はカジノで十分に楽しんだ後、待たせていたタクシーに乗り込んで目的地へそろそろ行こうかと談笑していた。

「あー面白かった！ 負けた時はどーしようかと思っただけ、取り返した時はほんとによかったよ！ 私、ゲームするのって初めてだったの。 いつも横で見ればっかりで……」

そこまで言った成だが、途端に悄然として言葉が途絶えてしまっていた。 成は思い出したのだった、団長のことを。 自分を遊びに連れていってくれたのは団長、そして一座の仲間たち。 団長はもういないし、仲間たちとも別れてきていた、それを思い、孤独感に襲われていた。

だがそれも数秒のこと、成は持ち前の明るさで返ってきていた。
「真也はどう？ 面白かった？」

あまり自分から打ち解けては来ない真也に成はよく話しかけてい

た。団長を消された成だったが、真也の前では気にした風でもなく平常の振る舞いだった。

「……ん」

頷いただけだったが、成は満足らしかった。

「そう！ よかった」

成は直人に今度は声をかけていた。「素敵な寄り道ありがとう！」直人は「いえいえ」と真也の背中越しに返していた。「さてと……行くか、サンタメリアのところへ」

向かう先は東で、直人が言うには司教サンタメリア率いる宗教団体の拠点がそこにあるという。手がかりはないが、行けば何かを得られるのではと確信に近く信じていた。アklamという土地にどこまで浸透しているのか、宇宙船でPRを見てから興味は湧いていた。だが防御もなしでは、という不安もあった。「何処かで武器でも調達できればいいんだが……」直人の心配に対して成は。

「超能力もあるし、何とかなるわよ」

楽観的だった。うーん、と直人は腕を組んで唸っていた。果たして本当にそれでいいのか気がかりである。

3人を乗せたタクシーは、目的の地へと加速していき街と街を通り抜けて行っていた。

コガネから東部、お客である成たちと運転手を乗せたタクシーは高速路を滑走していた。広く体系化された道路基準の法は正常に機能しており、目的地までにかかる時間はメーターも要らずに瞬時で判る。車両速度は一定で、距離さえ設定すれば時間が割り出せ、成たちお客は最初からそのつもりで過ごせばよい。タクシーに限らず

常にどの車体であつても速度は一定、速度変更が出来ないという不便さがあつた。運転手、とはいつても運転は自動「オート」で舵ハンドルはない、管理局が仕切つていた。事故は改善しなくても済む程度が年間数件報告されるくらいで、燃費が自腹でとなる自家用車を持つ者は少なかつた、持つのはほんの趣味で持つくらいだつた。

「このままロスモに行きますかね。寄る所は他にございますか、あと2時間で着きますが」

運転手は進行方向に向かつて右手側の座席に座り、予定時間を読み上げていた。運転手は接客が主、走るステーションワゴンはアクセルやブレーキもなく、時間を消費している。

「特にないです……ロスモってどういう所ですか？ 行つたことはあるんですか？」

成は運転手の顔色を見ていた。座席から振り返つた運転手は年老いの目で、白髪混じりの鬚をなぞつて成に答えていた。「ありますよ、何度も……私らみたいな、暇雇いがたくさんおられます」

成はえ、と高速マバタキで反応していた。暇雇い、という言い方に直人は僅かに頷いていた。

「アクラムでも極めて平和な所だ……平和は墮落や怠慢と同等と言うが、それもサンタメリアの布教の恩恵だろう。いいのかわいのか判らんが」「???」直人が言つたが、成には理解に悩む話だつた。「なんぼシステム化や機械化が進んでも、人は使わにやならんという事です」

運転手は歴史上のひとつの事件を知つていた。アクラムで過去に行われた残虐非道行為、人消しを。食物「連鎖」と同じで強すぎる弱肉の食糧を失い食つたものを失くし結末は自滅、機械化が進むと

人は活力と働きを失い時間を持って余し墮落、自滅していく、消えていく。何のための機械か意味は失い全ては滅びよ。

そうならないようにと食い止めるため思想は現実化されてテロが起こった。国のため星のため人のためにと……しかし思想は危険だと受け入れられず決して許されなかった。運転手も若い頃は許さなかった。

2時間をかけて、ワゴンは目的地ロスモへと到達していた。

宗教世界のことをベターとアクラムでは言っていた。さらに発展したものがクリウム、大が付き『大宗教界クリウム』と言われ、若者言葉では大クリと略されていた。では小クリはあるのかと言うと小ではなくソフトと言われていた。

甘さも控えめに布教をする精神論が展開されている。さておき。

暗いなか、野の次は荒野、荒野を過ぎると砂漠だった。砂漠の中心かと思われる所に、本拠地があった。施設が区画整理されて数千は立ち並ぶ、広大な敷地面積だった。建物が研究所にも見えた、今はひっそりと照明を残し佇み、人気はなかった。

「もっと植物や動物がいる、パラダイスかと思ってたのに……」

車から降りて開口一番、成はそう言っていた。

「レジャー施設じゃないぞ。とは言っても、宗教くさくはないな、初めて来たんだが」

「……旗がある」

「……旗だつて？」
「あそこ」

真也が目で指す先には施設の屋根があり、ゴシック建築の教会などに多く見られる小尖塔ピナクルが、ディテールは簡略化されていたが、

あつた。旗の棒は刺さり、天にさらして夜風によく靡いて白は映えていた。

白地の中心に記号のような印のような文字のような、輪のなかに十字を描いたシンプルな図形、何を意味するのかが明確では……なかつた。

「入信したければ、あそこに見える玄関口で直接アクラムの言葉で呼びかければいいですよ」

成たちを此処まで連れてきた運転手はそう助言していた。「アクラムの……ですか？」

「行くつもりでしたら教えて差し上げます。朝でも夜でも“こんにちは”という意味です」

運転手に言われて、成たちは顔を見合わせて「……どうする？」と聞いていた。来るまでは勢いで意気込んでいたものの、実際に来てみると尻込みをしまっていた。と同時に、嫌な予感までも付き纏っていた……砂の混じった風は強く、夜でも関係なく襲ってくるようで目が乾いてしまいそうだった。

「何だか怖くなってきたわ……このままのり込んでもいいけど、危険な気がするの……無防備すぎて……」

得体の知れないものを前にして、成はどうしていいのか判断がつかなかった。直人にも言われていたことだが気楽すぎているのだからうかと、後悔をしていた。

「俺たちには武器も手立ても何も無い。だが、戦闘をしに行くわけでもない。クオリアについて……知っているのか知らないのかを尋ねるだけだ。はるばる来て、帰るわけにもいくまい」

直人が成の肩に手を置いて落ち着いて考えるようにと諭していた。「もし……もし、“クオリア”という存在が、……危険だったとしたら？」

成の不安と疲れはピークに達していた。一行は押し黙ってしまい收拾がつかなくなってしまうようになった。

それを払拭しようと、直人が決着^{ケリ}をつけていた。

「それでは……明日、出直すでしょう。今日はもう遅い時間帯だ、訪問されてもあちら方だつて受け付けてくれるとは言い難い。今夜一晩近くのホテルにでも泊まって、ゆっくり考えておくといいだろう」

……

運転手の勧めで、温泉へと赴くことになった。砂漠のなかで造成された人工温水は薬効があり、リゾート地、保養地として途上し更なる開発に努めていた。砂漠のオアシスとも連携していた。まだアラムの起源の頃より衛生や医療が不完全だった時代では、不思議とケガや病気が治ると人々にもてはやされていつしか聖地とも呼ばれるようになった。その延長もあつてか、信者はよく利用しているという。

広大な砂漠で砂煙をたてながらの移動で、全身が乾燥と埃まみれで、直ちに温泉に入つてさっぱりしたいという成の希望が叶えられていた。宿泊施設としてなり潜む宿やホテルのなか、どうせ泊まるなら露天風呂があるホテルに成たちは決めて、チェックインを済ませて部屋へと案内されていた。部屋は2室をとり、成がひとり部屋へと行く前に突如、直人が言い出した。

「武器屋の当てが見つかったから、交渉してくる。先に風呂に入ってきてくれ」

成がいつの間、と言う前に直人は用件を告げるともう何処かへと素早く行ってしまっていた。真也が支払いと宿泊手続きをしている間になんと成は頭を掻きながら思つて、フロアの隅に立てかけら

れていた案内掲示板に振り返っていた。

温泉は冷泉もあり、治療を目的に鉱水療養泉が主であったが、飲める温泉もあった。好評で売りに出されていた。神経痛、筋肉・関節痛、冷え性、疲労回復、健康増進のほか、水虫や便秘にもよく効くらしい。

露天風呂は男子、女子、混浴と別れていた。大胆にも成は、「別に混浴でもいいわよう、芸人生活してるとき、大人子ども関係なく共同生活してるんだもん。へっちゃら」とは言っているが、真也は遠慮していた。「静かにひとりでいい」とプイと向こうへ行ってしまった。「ちえー」
置いていかれた成は舌を出している。

外を展望できる露天風呂は最高だった。夜も遅いが、空は星空で、幸いなことに雲も邪魔するものもなく十分に満喫できるはずだった。だが真也は岩の並ぶ温泉に浸かっている間、上空を見てはおらず寝ているようである……クオリアを、思い浮かべていた。

昔をも思い出していた。ドブネコと罵られる居住区の、『元締め』に真也は世話になっていた。情とは言い難しに働かされて、配達もあれば盗みなどもやらされていた。盗みは正直嫌だったがそれでも子どもだった真也からしてみれば、此処まで生き残れた恩があり得があり運があり、表には出さないが元締めに尊敬もしていたらしい。早く成長して楽になれたならと、日増しに脳は考えで固まって視界は自分一色、孤立で独立、無援、感情は　そぎ落とされていつていた。

やがて真也は『元締め』を失う、すたとんと欠落したように感じら

れて戸惑いがあった。

殺したのは初めて見たシュセンドで、真也の価値観をまるで違うものにした。殺すのは生きるため？ そのためには殺すのもいけないことでは……な、い？ ……正義は矛盾していた。

真也がシュセンドの存在を知った時、彼の運命は変わって、決まっていた。「生きるためなら」

決心をした日の空はよく覚えていた、電ひびが体に打ちつけた日だった。決心をした日は『シュセンド』としての実行をした日でもある。「生きるためなら」……顔を打つ電が穴を空けそうで、痛かった。

『おいでシュセンド……』

聞いたこともない優しい音色で真也に囁いている。彼のなかに現れたもの……それがクオリアだった。

「クオリア……」

真也は、大宇宙オークション、クオリアの境遇を知る。余計な情報も、彼の素直な内面にはよく染みて行き届いていた。「僕が君を買うから……」

クオリアは真也にとってかけがえのないものとなった。

彼は殺す、お金のために高値がつく光の者を、ひとりでも2人でも同じだ、お金のためにクオリアのためにそして。
生きるためにだ。

……

一方、成は岩に囲まれた白く底の見えないにぎり湯に肩まで浸かり、目に飛び込んでくる星々を眺めては感嘆の息を吐いていた。「しあわせ……」体内の悪いものが溶けていくようで湯気のなか、至福心地だった。湯に浸かっていたのは成の他に数名とプラス動物たちで、豚、鳥、牛、羊に似ていた。ぐつぐつと煮込まれて傍目からだと旨そうにダシがとられているようだった。

成が風呂からあがると、男湯の方へ従業員たちが慌てた様子で駆け込んで行ったり、「医者を！」と叫んでいたりと騒がしかった、通りすがった成は首を傾げていた。

「？ 何があつたんだろ」

気になった成が方向を変えて行ってみると、男湯の入口付近で人だかりができていた。「誰かが倒れたみたい」何かを取り囲むうちの野次馬が教えてくれていた。成は人をかき分けて、前列へと向けて背が足りない分、首を長くして様子を窺ってみた、すると。

「あ！」

目に入ったのは自分の知っている者 真也だった。腰にタオルが巻かれて従業員による介抱が行われている。「真也！」

どうやら風呂でのぼせてしまったようで、真也は担架で宿泊部屋へと運ばれていった。

真也はクオリアの幻影を見たのだった、声まで聞こえていた。

「ようこそ真也、早く来て……」

真也は、クオリアに触れたく、抱きしめようと手を伸ばしても、

届かない。クオリアは微笑むだけだった。

岩場で足を踏み外し、真つ逆さまに落下する。

(クオ……)

気絶し、周囲の人々に助けられて。クオリアは去っていった。

「早く私のもとへきて、シンヤ……」

真也は何度でもクオリアの名を呼んでいた。部屋へ運ばれベッドで寝かされた彼の寝言は、傍にいた成にとって苦痛でしかなかった。何故そんなにもクオリアに固執するのかが成には解らなかった、ただ悲しい、それも成には説明しろと言われても答えることが可能ではなかった。

心配に、成が真也から片時も離れず数時間を過ごしていると、やっと真也は意識を取り戻して目を開けていた。自分を待っていたのはクオリアではなく成だと知ると、無意識だったか息を漏らしていた。

「成か……」

成には、それが悪いことのように聞こえてしまっていた。

「クオリアじゃなくてごめんなさい」

真也にとっては自覚は薄く、「謝る必要ないだろ」と何処までも冷静だった。「何となくね」「直人はまだ？」「……話題はすり替えられ、関心は違う所へと向かっていた。

「そういえば遅いわね。何処で道草くってんだろう、それとも、交

涉とやらが上手くいつてないのかな……」

直人と別れて、成たちは風呂に入り、真也が起きるのを待つまでかれこれ結構な時間が経っていた。真也は上半身を起こし、傍に置いてあった、風呂で持ち込んでいたはずの服を羽織って姿勢を楽にしていた。武器、と聞き気持ちが高まっていく鼓動に耳を澄ましている。

「武器がたとえ手に入らなくても……俺は行くから。入信するふりをして、クオリアを探すつてもいい……その間、シュセンドの仕事ができなくなるけど」

真也の口振りだとアグラムでの長期間滞在を考えているのか、切迫していた。

「あなたがシュセンドでなくなるっていうのなら、それはいいかもしれないけどね……でもやっぱり危険すぎる。だってもし精神操作マインド・コントロールされたらさ」

成が何を言っても、真也にそれが響いてくれるのかどうか……無駄に終わりそうだった。

「さあな。どうなるかなんて考えるより、とにかく実行することだ」

素性の知れない相手を目前に高揚してきているのか、真也は自信に満ち溢れていた、もうクオリアを見つけたんだと勘違いしている感は否めない、成はきゅ、と口唇を噛んでいた。悲しさに悔しさは、成に突拍子もないことをさせてしまうのだろう。「ねえ、真也」「何」「ぎゅーって、していい?」「ぎゅ?」

雑巾でも絞るのかと思った真也だったが、成が真也に飛びついてきていた。防御する間もなく真也は後ろへと押し倒され、成にがちりと擬音通りに『ぎゅー』とされていた。

「抵抗しても無駄。真也は、直人や成より力ないもん」

成も真也と同様に強情で、捕らえて強く抱きしめ絶対に放さなかった。真也は抵抗し、もがき、怒りが煮えてきた。「やめろよ！おい！」それでも緩まねず、成はしつこかった。「ちよつとくらいいいじゃん！」……

一度ピークに達すると、後は下降するだけだった。

「クオリアじゃなくなつて、別にいいじゃん……」

成の頭は真也の胸元に埋もれていた。「……」表情見えなく淋しそうに成が呟いた時、真也は黙ってしまつて動かなくなった、いや、動けなかった。成が親のいない境涯で、育ての親はもういない、真也の目線の先には、カジノで儲けて換金された分の小銭の入った袋が置いてあった。飾り棚の上に金は金で動作もなく使う者を待っている。団長を狙い、自分が成の運命を変えてしまったのだと真也は抱きつかれて成のことを思った……成は、成のおいがしていた。

「……もう、いいだろ」

時を数えず、沈黙から真也は返ってきた。テレキネシスを使えば成の力などはねのけられただろう、だがそうはしなかった。

「うん……ありがと、真也」

埋めていた頭を起こすと、成は嬉しそうに笑いかけていた。体が離れて解放された真也は、残された体温に敏感に反応した。

「お前の体、あつつい」「だって、風呂あがりだもん」

時刻は深夜近かった。成は眠くなつてきて、部屋へ戻るねと言い目を擦りながら立ち上がった。成をドアまで送っていき、おやすみ

なさいと成が出て行こうとすると真也も「ああ……おやすみ」と挨拶をした。ガチャリと閉じたドアのあと、ひとりになった真也はため息をつき……上を向いて目を閉じていた。

まぶたの裏に浮かんだのは、カードゲームで成が勝利を決めた場面だった。大はしゃぎで、飛び跳ねて、しがみついて、喜んでいた。シュセンドで報酬を得ても、誰もあんな風に喜んではくれない、成は悲しそうにするだけだ、決して笑ったりはしない、しない。

(それでも構わないんだ、俺は……)

真也がこれから見るであろう夢は、無理やりに変えてみている。クオリアがいて、“そうよ、真也……あなたは私の……”と。

微笑みかけていた。

紹介された武器商人は、ゲン・カツラギと名乗っていた。

「よろしく。ふふ、可愛い子たち」

品のあるウィッデイ系の香りを漂わせ、髪の色は成の金にも近く、繊細な髪は自然に切り整えられて美しい。立ち姿は手本のように、脚は長く、指輪やブローチなどの装飾が彼の引き立てに釣り合いがよくとれていた。彼、そう、男だった。「あなたたちに合いそうな銃を紹介させて頂くわ」カツラギは、真空式のアタツシユケースを持ち込み、ゆつくりと開くと、真也たちの前でお披露目していった。

成は興味津々、真也も直人もカツラギの手もとに集中して銃が紹介されるのを待っていた。早朝に起こされて成と真也は始め直人を不機嫌に部屋で迎えてしまっていたが、眠気でぼんやりとしていた頭は次第に覚醒してきたようで、視界ははつきりとしていった。

直人が連れてきた男、カツラギを迎え入れて空気は一変していた、身に着けていた香のせいだろうと思われた。「10挺選んできました、まずはこれね」口調が女性のように物腰柔らかく滑らかだった。つい身をのり出して聞きに入っていた。……

以下が、それだった。

- ・『わをん』自爆用。後がない、という意味でXYZと似ているが、“和音”とも掛けている。銃声の音色が美しい。
- ・『わをんR』わをんより大型、強力型で、周りをも巻き込む恐れ

がある。音に酔う。

・『ダムダム銃』ダムダム弾専用。ダムダム弾が飛び出す。ダムダムしている。撃たれるとダムダムし、抵抗不可能ダムダム。

・『睡眠キカ学発生銃』眠るようにして安楽死し、死んだあとは水分蒸発でミイラ化するかもしれない。

・『シャープペンシル鉛筆型』「S P E型」『シャープペンシルを知った鉛筆の気持ちになり、見た目は鉛筆だが先っぽからはシャー芯が飛び出す仕様……芯ではなく、針。

・『ピストル』撃たれたら体が痒くなり笑いが止まらなく幻覚を見る。“ピース”という薬物が入っている。

・『マグフォ』普通の銃。8発までしか撃てない。しかし同時発射ができ、一度に2発以上の弾が撃てる。

・『マグフォファイナル』マグフォ改造銃。マグフォの耐久性を追求し限界に挑んだ。8発撃ってしまうとあとは使い捨てるしかない。

・『パナシヨニツク』普通の熱線銃だが電池式。軽量で女性向きだが電池式。何が言いたいかというと電池式。ソーラーにも対応している。

それぞれ銃の個性があつた。真也には鉛筆型の「S P E型」が渡された。「何で?」「何となく」真也が頭を捻りながらカツラギから銃を受け取って、カチャカチャといじって遊んでいた。

成にはパナシヨニツク、直人にはマグフォが渡された。別に何でもいいと全員が思っていた。直人は昨夜、カツラギではない武器商人と交渉に当たっていたらしいのだが、提示されたべらぼうに高い金額に直人はとても手が出せそうではなかった。そのため諦めて帰ろうとすると、ひよっこりカツラギが何処からともなく現れて直人を誘った、カツラギは金額についても了承して、安価で手頃な持ち銃を集めてきたのだった。買うに安くて済むが、ほんのばかり真剣味には欠けていた。

「9挺しかないが？」

直人がマグフォに弾を装填する仕草をしながら気がついた。「最後はとっておきの、これです」カツラギが待つてましたと取り出した銃は、精巧に出来ていた。

『クオリア』 H2O/湿気と光と細菌から精製して弾を自動に作り出し、弾数は無限、ただし使用しない時はOFFにしておかないと暴発するので、怠け者にはリスクが高く扱いづらい。威力は大きく“遠隔”にすると最大で30メートルは飛ぶ。

銃の名を聞いて瞬間的に敏感反応を示したのは真也だった。深く考えず、喉から手が出てしまった。

「その銃をくれ」

真也は真剣だった。カツラギは何故そんな態度を、と驚いていた。「私たちクオリアを探しているんです……」成が横から口を出して簡単にわけを説明していった。

「偶然、ねえ……」

カツラギは、はあ、と銃を渡しながらため息で奇妙さを覆い隠していた。首辺りを撫でながら何ごとかを考えて、まあいいかと受け入れてカツラギは言い出していた。

「クオリアなら、ウチにいるけど？」

あっさりと、交渉は滞りなく続いていっていた。

淡泊なカツラギは口が軽く、自らの立場も判っているのかいないのか、素性を明らかにしていった。カツラギ、彼の言う『ウチ』とは、成たちが訪問したクリウムの本拠地のことだという。

彼は大司教サンタメリアの補佐役に身を置いていて、クオリアの警護や教育まで任された司官の役職だった。それが真かどうかは彼の口からでは確かめることができなかった。「何という偶然」成たちは懐疑に悩むしかなかったが、カツラギにとっては論も持たずで、「来ればいいわよ、会えるから」と誘いかけていた。

あまりにも旨い話だったが、カツラギについて行くことになった。

ロスモ、北と南を山脈で挟まれた、自然と共存性の強い土地だった。いつしか砂漠化が進み深刻化し、原子爆弾の開発目的として国立研究機関が創設されて以来、天然生物は絶滅するか寄りつかなくなる一方、技術者の志願の場となりつつあった。通信技術、環境、レーザー、材料工学、生命技科学、ナノテクノロジー、高エネルギーなど時代ごとに先端科学技術は施設と予算を増やし、総合研究所として発展・発達をしていった。

そこから派生したのか考えにくいだが、ある勢力は技術と予算を与えられ拡大してしまった、その勢力が……サンタメリア、宗教団体の一派だった。注釈が要るが、この宗教団体には正式な名前が無い名前を表すことは曝すことであり、曝す、とは（１）広く人々の目に触れてしまう、（２）危険な状態に置かれる、（３）さらしの刑に処される、として防壁を張っていた。代表してサンタメリア、司祭の名が使われていた。

サンタメリアは輪廻と転生、レンタルの教えを理念に信者を着実に増やし、研究機関は彼の支配下へと「協力」という譲歩で介入されて境界は曖昧になってきている。ロスモ国立研究所、今は施設の姿を残してはいるが、旗が象徴に掲げられていた、永遠なるリング

のなかに、傷をつけたように刻まれた十字の記号、皮肉にも不可解にも、それで傾きなく調和がとれている。白地は平和を強調するのか、果たして。

本拠地に到着した。カツラギを案内に、門を開く。

「クレイスマ・プルーダ（こんにちは）」

化石で出来たとされる大門は、ハードスコープによる瞬時の識別を終えてカツラギが率いる客人たち、成、真也、直人を順に通していった。施設で敷き詰められたと彼方遠方、丘から見下ろしていた景色は、足を踏み込んだと同時に挿げ替えられてしまっていた。緑が、森が現れていた。

「風が……」

成がめくれる上着を押さえ、肌に当たる風へ疑問を出していた。湿り気を帯びていた。

「地下水路があるの。規模が大きい、そのせいね。数日前に局所大雨が観測された場所から引っ張ってきているけど、少し寒いわ。まだ微調整までは時を要するのね」

カツラギが説明しながら先へと急いで、施設の昇降口へと入って行った。入る前に成は一度、360度の景色を見回してみていた。楽園という名に相応しいのではないだろうかという景色……遠くで鳥はさえずり、空気も森のおかげか澄んでいて清々しい、光に反射し輝いているのは噴水だが人工で出来ていそうとはいえ自然とけこみ一体化していた、彫刻という芸術品が無人の代理で見張りをしていた。自然との共存……そこに美があった。「行くぞ、成」
「うん」

此処ならクオリアはいるかもしれないと、成は思っていた。

「外から見れば信じられないでしょう？ 此処は。それもそうよ、この敷地全体に量子化シールドを張っているし。まだ防御には開発段階だけど、視覚的な効果だけを先に今は重視しているの。対ミサイルには程遠い……金と時間がかかりすぎてねえ」

視覚的效果、要するに『見てくれ』だった。成たちのように、外観からでは施設敷地内の快適さは分からないだろう、『だまし効果』とも言われていた。「なるほど……」成は空しか見えない空間に、絵の描かれた壁があるのだと解釈し、もつと何かないかと興味注がれていた。カツラギの説明を待っていた。

「所々にアユリカという案内ロボットがいるの。もし迷子になったら使うといいわ」

待たずとも、カツラギは返事を期待せず話し続けていた。

「森や施設内に信者がいるのよ。君らみたいな一般人がね。宗教って聞くと大概、セールスや詐欺への勧誘みたく思われて嫌になるのよ。彼らも普通の生物よ？ ちよつと住む社会の気風に合わないだけ……」

カツラギは、おしゃべりだった。

地下エレベータも使い、入り組んだ施設内は長かった、迷路で楽しんでいただけではないが、成は疲れが出てきたのか足の裏が痛くなってきていた。直人や真也は平然と過ごしている。カツラギは相変わらず話し続けていて、成が休みを願い出ようかと思った矢先だった。

カツラギの足が、ふと止まっていた。

「この先にお求めの『クオリア』がいるわよ……どうぞそのドアか

ら入って」

促されて指し示した方向には、黒の入口だった。真っ黒、模様も取っ手もない、四角く塗られただけのようにも見える。「入って、って……どうやって」成がどうということかと『ドア』に近づこうとすると、直人が前に出て言った。

「待て成。俺が先に」

直人が歩み出て、黒いそれを凝視していた。「何だ、ドアが開いててなかが暗いだけだ」

直人が言うと、カツラギが補足していた。

「そうよ。照明はなかだわ、クオリアったらドア開けっ放しで……奥で寝ているのかしら」

カツラギが呆れて物を言っていると、成も真也もドアの付近へと近づいていった。「なかに入っているのかしら……」成がひよこりと部屋へ頭で覗き込んだ、その時だった。

どん。

全員、背中を順に押されていった。

落下して、折り重なって着地していた。一番下に直人、真也の上に成が載っていた。

「ぴい……」「ぐ……」

光が入ってくるのは入口からのみで落ちた所に明かりは無く、直人の呻きはよく通っていた。「ど、どいてくれ苦しい……成の方が重い……」さらりと失礼なことを言っていた。「何も見えないいー

怖いー」成は混乱していた。

カツラギだけが落下していなかった、落ちずに、入口付近で留まっていた。それもそのはず、成たちを落とした張本人だったからである。

「悪いわね……悪かった。ふふ、此処までご苦労」

ドアはドアではなく『穴』だった。カツラギに誘導され、『ドア』だと思いつまされていたにすぎなかった。もつと言うと、入口は高い位置にあり地面は遠かった……重力に沿って格好悪く3人は落下していた。カツラギは楽しそうに高見からの見物、しかし残念ながら成たちの姿が暗くて目視できなかった。

「まさかクオリアを外部の者が知っていたとはな。危険と判断、君らを排除するよ。役目なんでね」

カツラギの口調はがらりと変わった。カツラギという『男』、暗闇に落とされた成たちとは違い、歩いてきた通路の明かりのおかげで逆光だが顔はまだよく見えていた。だが、表情はなく味気なかった。

「わ、私たちをどうする気なのよ！」

見えないが成は怒って叫んでいた。カツラギは見下して言い放っている。

「そこにいる奴に聞いてみたらいい。……グッドラック」

恐怖を煽る言葉を残してカツラギは去って行った……あとに恐怖は、現実のものになった。

ぐるぐる……

強い白光が並びに2つ、それは眼光で、活力という炎が燃えて熱さが空気という波にのり。

制御を外した獣は成たちに襲いかかろうと、光をなおいっそう強めていった。

穴は閉ざされてしまった。

「きゃああああ！」

成の悲鳴は空しく響き、より一層の恐怖を引き立たせていた。「ぐぶぐぶぐぶぐる……」腹からの吐息か、声にもならない重量のある音がしていた。閉ざされて見る機能を遮断され、恐怖は蓄積され気は病と化し、こうして滅びていくのだろう、成は動転していた。「落ち着け、見る」「？」

顔を庇う成を前方で支えながら真也の「声」は、成を救っていた。成は顔を上げて「敵」がいるのかと思わしき地点へ注目していた。真也が促した通り、「敵」には……。

「敵」は、発光していた。青白く、皮膚と皮膚の隙間から光がこぼれていたのだった。入口が消えたことにより完全に暗闇となったおかげで「敵」は、自らの正体を明かすとともに成たちを慄然の淵からすくい上げてくれたのだった。「ギシヤアアア……」金物を研ぐくらいに高く鈍い、鋭い奇声が鳴り止まなかった。

古代の恐竜か、爬虫類と呼ばれていた生物だった。巨大なトカゲとでも言えば分かるが細胞は、青白く輪郭を浮き立たせるほどに発光していた。全長は、家屋の屋根まではあるのだろうか思っていたよりは小さかった。だからといって不安や焦りが無くなったわけはなかった。

「あんな化け物を映画で観たことがあるぞ。奴らには知力が無いんだ、本能が働いているんだ。侵入者に警戒しているのか、空腹なのかどっちかだろう、慌てず騒がず、……そうだ、銃を試してみたら

いい」

直人が提案し、上着の内ポケットからカツラギより買った銃『マグフォ』を取り出して状態を確かめていた。直人の余裕のおかげで成も真也もつられて、それぞれ与えられた銃を取り出していた。

『敵』は待たずに襲いかかってきた、真也めがけて影が動き空中を高く跳んでいた。ガツ、ペタ、ペタペタ……床を這う足音がしていた、真也は軽く避けてしまっていたが『敵』は跳んだあと難なく着地し、振り返って目を光らせて成たちを威嚇しようとしている。だが今度は成でも怖がるのが少なかった。

「た、試しに私が」

臆病から脱出しようと思えば、自分の持っていた軽量熱線銃『パナシヨニツク』を手に構える、鮮やかに赤くてポップなその銃は、成に活力を与えていた。狙いを定めた。「よし」

まずは一発。成は思い切って、と熱線を発射していた。『敵』には当たったり当たってなかったりで、本当に効いているのかと聞きたくなってきていた。すると最初のうちはよかったが、数回引き金を引いても銃は何故だか熱線を放出しなくなってしまったのだ。」「な、何で!?」困った成は、グリップ部分を見てそして気がつき唸ってしまった。残量表示、数字が『0』となって表示されていたのだ。何が残量『0』なんだと考えてみれば答えはひとつ思いついていた。カツラギがしかと説明してくれていたのは銃が『電池式』であること、残量がない、つまりは充電切れだった。「げげ」うんともスンとも言わない銃が憎らしく見えてきていた。

「使えない! もお!」

成は銃を放り投げてしまっていた。『敵』は倒れることなく元気に活動していた。「ぐおおおお……」銃はソーラーにも対応しまずと宣伝文句を並べていたが、此処には日光はなかった、非常に残念だった。「ぐるるる……」

真也が自分の持ち銃、『シャープペンシル鉛筆型「SPE型」』で攻撃を試みていた。見た目が鉛筆の型でシャープペンシルに対抗意識を持つという設定らしかった、真也にはどうでもよかった、撃てるなら。

撃鉄部分を起こして発射している、すぱん、すぱんと弾かれて動力の音は小気味よく聞こえていった。芯ではなく針が飛び出すのが、『敵』に突き刺さってはいるものの、ダメージを与えているよりは針ツボ治療で刺激を与えて健康になってやしないかと過ごすうちに疑いがかかってきていた。

「どうぞ次」

真也は諦めて、隣の直人に出番を譲っていた。「大丈夫だろうな、この銃は」いくら安価とはいえ、少しの役にも立っていないというのはどうだかなあと直人は嘆いていた。直人は撃ち方を教わった通りに構えて4発同時の弾発射に挑んでみている。マニュアルに沿って弾は発射されたが、『敵』の足下を崩しただけだった。ぐらりと体が傾きかけ、バランスを失いかけていた『敵』は、持ち直そうと足掻いて離れた位置に移動していた、だが直人は追いかけて、銃は使用せず肉弾戦に挑んでいた。

「申し訳ないが」直人は銃に謝っていた。謝る必要性が解らない。

『敵』は尻尾を向けて振り回し始めていた。なので直人は尻尾に体当たりも兼ねて食らいついていた。まさかそんなと成が小さく呟いたあと、『敵』の体は直人によって地面からしばしの別れを告げて空中を舞い、……再びに地面へおかえりなさいと叩きつけられていた。ぱっしん！「ぴぎゃ」信じられないくらいに可愛らしい声、赤子のような悲鳴で『敵』は確かにダメージを受けていた。

「凄いい……力持ちだね」「……」

ぱちぱちぱちと拍手していた成と、無言の真也。呑気そうに構えていた2人を、直人は叱っていた。

「こら馬鹿！ 俺が時間を稼ぐから、出口でも探しとけ！」

言われて2人は、『敵』の光のおかげで完全な暗闇ではなくなった部屋から出口を探し始めていた。2手に分かれて探していると、成が隅で排水溝の金網を発見するに至っていた。はき出された水は何処へ流れ向かうのかと伝ってみると、マンホールがあった。

「真也、ちよつと来て！」

慌てて真也を呼び、蓋を開けられそうにないか、と頼んでみると真也は「重いだろうから、少し待って……」と素手でまずは開くかを試してみていた。成もそれは手伝い、不思議なことに重さがなくなっていくのを感じながらも蓋を開けることに成功していた。真也のテレキネシス能力は役に立っていた。

「直人ー！ 此処から出られそうだよ！」

開けたあとを調べてみると水の他に空気が流れており、成にはにおいに覚えがあった、施設内で嗅いだことのあるにおいで、外に繋がっているのに違いないと確信していた。人も充分に通れそうだった。……

出口を見つけた一行は、まずは梯子を降りて、地下から地下へとさらに深い底へ行くことになった。無臭で、水が溝を伝って流れているため湿気があるが、それとは違って気味の悪さが付き纏っていた。監視でもされているような気配といえば解るのだろうか。人が

数人でも横並びで通れる幅のきかせた地下水路で、カツラギが言っていた規模とはこれのことではと思われた。

時々に進路は枝分かれし、成の当てになるのかが不明の勘で先を急いでいた。「こつちよ」迷う暇などないと、一行は突き進むのみだった。探していたのは出口、本当はクオリアへの手がかり、出来ればクオリアとも会いたいかと念頭に置いていた。特に後者は真也が強く願っていた。

「待つて」

ぴちゃん。水の撥ねる音が一緒に被さっていた。先頭に行く直人、続く成が同時に後ろの真也に振り返り訊ねていた。「どうしたの真……」言いかけて、「しつ……」真也が指を突き立て黙るようにと示していた。立ち止ったまま数秒を過ぎすと、真也がぼそぼそと確信で左手先の方向を見ながら言っていた。「人の声がある……誰かいる」成たちには判らなかつた。だが、真也が直人を抜いて先頭に立ち慎重に歩き出すと、声は成たちにも聞こえてきていた。

地下水路は所々に監視部屋を設けているらしい、施錠されたドアがあり部屋があり、真也が壁に背をびつたりとくつつけて息をひそめながら近づいていくと、直人や成もあとに続いて行った。

鉄格子のあるドアの小窓から覗き、部屋にいたのはラフですぐに破れそうな防護服を着た2人の平凡な顔立ちの男たちで、事務の机の上にお菓子を広げながら談笑しているようだと分かった。監視カメラの映像が数面、壁面にディスプレイ「出力表示」されていた。まずかった、と真也は心して思っていた。

（「どうしたの」）

（「監視カメラに俺たちが映っていたかもな」）

（「えっ……」）

（「大丈夫らしい、奴ら悠長に寛いでる。気がついてないんだろ」）

（「よかった……」）

（「よくない、いつ何処でカメラが見張っていたのか……微小カメラか、クリアカメラか……迂闊に行動できないな」）

小声での会話の先は、成たちを悩ませて解決策が見い出せなかった。沈黙すると、部屋のかなかに別の何者かが急にやって来たらしく、男たちがお菓子を高速で片づけて出迎えていた。

「何か変わったことは？ 報告しなさい」

真也たちには見なくても察しがついていた。カツラギ、見た目は華やかで吸い寄せられてしまいそうになるが、真也たちを奈落に落とした油断のならない男だった。カマくさい言葉の使いは性にも合っている気がして違和感はない。

「はっ、此処では特に異常はありません。それで報告ついでで申し訳ありませんが、つい先ほど、先日にも捕らえてきた地底民族マダルキシユの連中、4名のオークション出品登録が完了したとの報告を受けました。もう耳にされていたかもしれませんが、改めて報告申し上げます」

男のひとりがカツラギに恭しく礼をしていた。カツラギは、ほうと頷き関心を持っていた。

「そうか、結局4名か、生き残れたのは」

カツラギの返しは鋭さを帯びていつていた。

「はい。なかなか、試作は完成しませんね……効率が悪いですし」

「では赴くでしょう。……何処だ？」

「せせらぎの部屋で、ございます」……

男たちもカツラギも、部屋をもぬけの空にして行ってしまった。これなら今のうちに移動すればと真也は先を急がせていた。

「ま、待つてよ、真也」

真也を焦らせているのはクオリアの存在のせいである　クオリア、クオリアは何処だ、何処にいる？

逸る足は止まらない、後ろを見ない、正解のない未知^{みち}を辿^たっていた。

成と直人は真也を追って、水路をひた走っていた。ところがだつた。

成の足の下、ぽつかりと穴が開いてしまう。「へ？」狙われたのでは、と思うくらいに突然の出来ごとだった。どうやら元からそこだけが崩れていたようで、成の重みで床が陥没したらしかった。「成！」直人の叫びも悲しく成は真下へと墜落していった。「ああ……」どうやらまだ地下へと施設の構造は続いているようで、水路から落ちた成は垂直にと暗いなかへ消えていった。

……

宇宙は広い、どれだけが宇宙なのか、夢、それは現実とは違うのか。

理想を描いた者の肉体は戦に滅び、意志は受け継がれて連続し、叶えられていく。幸せを求めた者は、幸せに。不幸せを願った者は不幸せに。要求は叶えられる。笑った者は笑われて、痛みを与えた者は痛みを与えられる、受けては返し、受けては返しの連続を……

……

厨房では、ヤオパ族の子どもと大人たちが大鍋のなかの泥色スープを交代でかき混ぜて、調理をしていた。褐色の肌を持ち、絵具で描いたような頬のしるしは子どものオリジナルだった。ふざけて遊んでいた。

「うー、まっずうい！」

味見をしていた子どもがよからぬ声を上げて周囲をガツカリさせていた。「やっぱりねー」

「あのケノコがヤバかったんじゃない？ 色がおかしかったしー」

「せっかく作つたけど、『エコツた君』にかけちゃってよ」

大人も子どもも交じりながら食事は作られていた、すると。

がっしやん。

カラカラ……

鍋や洗浄機などが乱雑に置いてある収納スペースへ、天井から客は降ってきていた。鍋の蓋が転がって、子どもがそれを拾い上げていた。

「ママー、何か降ってきたよ」

子どもは有りのままを母親に報告していた。言わずもがな、母親どころかその場にいた全員が驚き集まってきた。「んまあああ」鍋を火にかけたままで、騒然としていた。

（いたたたた……た？）

成はじつと打ちつけた痛みに耐えながら、身の無事に感謝していた。どれだけの距離を落ちてきたのか狂った頭では覚えてはいなかった。成が起きて所在を確認すると、注目していたヤオパ族の大人と子どもがわあ、と歓声を上げていた。

「だあれ!?」「きゃー、可愛い! 何処の子なの!? 迷子!？」
「こつち向いてえ〜」……

その熱気に圧倒されて、成の目は点になってしまっていた。

「あ、あのその……此処は何処でしょう……出口が分かんなくって……」

成が収納台に正座して汗をかいていると、大人のひとりが前に出てきて成に話しかけてきていた。

「出口なら、そこを出て道なりに進んで階を上がって……そうだね、アユリカを呼びましょうか」

子どもを呼び、子どもが『アユリカ』を呼んで連れてきてくれたのだった。『アユリカ』 銅鐸みたくずん胴で、顔は半円形に笑顔で作られていたが部品で目隠しされていた。足も手も球が埋め込まれており、手は場合にに応じて飛び出せる仕組みになっていた。あくまでも案内用で、会話機能はついていなかった。コロコロと肉球を転がして走り、ボディは全身がピンクと全身が白の2色がある。

「これがカツラギの言った『アユリカ』……」

何とも言えないキモ可愛さがあった、成は持ち帰りたいたいと思っってしまった。

「カツラギ様とお知り合いの方なの? 案内と連絡用のロボには2種おりまして、『アユリカ』と『アプリカ』が施設内で巡回していますわ。『アユリカ』はご覧の通りに大人しくて守衛型。『アプリカ』は攻撃が専門でちよつとそそぐがありますわ」

親切にも、ヤオパ族は成に世話を焼いてくれていた。友好的でどうでもいいことまで教えてくれていた。過去にアプリカとアユリカ

の結婚式が開かれたこともあるとまで教えてくれた。

（アプリカってどんなだろう……）

成は、まあいいかと厨房を出て行った、アユリカに案内されて、施設内の住人のふりをして普通に何でもなく廊下を歩いて行っていた。

真也と直人が見つければいいのにと思いながら、逆にカツラギに見つかったらどうしようと思いつつながら成は施設内を渡り歩いて、幾人かの信者たちとすれ違って挨拶をしていた。おばあちゃんから子どもまで、年齢だけでなく人種さえも違えば出身も違つし、考え方も違つだろう、同じものがひとつもないくせに何故だかひとつに纏まっている。

此処はひとつの体系化、生活形態が出来ているような気がしてならない、それを叶えたのが　　もしや、サンタメリア、なのだろうか。

（平和だ……）

平和は、墮落または怠慢と同等だと誰かが言っていた。成にはまだよくも解らぬ世界の話……だった。

不穏な動きが潜んでいた。

シールドで囲まれたサンタメリアの“楽園”は、見せかけにすぎなかった。金を積まれて手を繋ぎ形となって現れたものは滅びへと時間をかけてゆっくりと進む。名をつけてはいけないと言われているように、神をつくってはいけないとされているように、理想は叶えば滅びてしまっただろう。形あるものいつか壊れる、何故なら、触れるからである。

サンタメリアの理想や地位を妬む者も少なくはない。

……

アユリカに案内されていた成だったが、出口にと辿り着く前に成はイチかバチかの賭けに出ていた。アユリカに、クオリアを知っていたら案内してほしいと頼んでみたのである。

まさかね、と成も無理承知のつもりではあったが、アユリカは方向転換をしまして、来た道を戻っていったのだった。それを見て『まさか』に成はごくりと唾を飲み込んでいた。

施設内は延々と同じような窓や扉、壁が連続していて戸の開いた隙間から信者が修行や瞑想をしている様子が見えていた。外からラニングをして帰ってきた者や、白衣を着た医療関係者ともすれ違っていた。特段変わったことのない、信者とは側面だったのだろうか。成は黙ってしまっただけだった。

突然、地震が発生した。「！ きゃ」

建物全体が揺れていた、数々の悲鳴があちこちから生じていた。成は思わずアユリカにしがみつき、揺れが治まるのを待っていた。始め断続的だった揺れが感じにくくなると、成からアユリカは逃げて飛び出し左右にふらふらと進んで行ってしまっていた。成は焦ってアユリカを追いかけて行った。「待つてよー」バタバタとみっともなく走り出して階段を降りていくがアユリカを見失ってしまった。案内がなくなつて愕然としてしまった。「あちゃー……迷子だ」仕方なく、成は自力で真也たちを探して出口を見つけようと肩の力を抜いた……その直後だった。

「道に迷つたの？」

透き通るようなムラのない声が成に呼びかけていた。成が振り返ると、立っていたのは白のモチーフを織り込んだワンピース姿の美しい女性で、ウエーブのかかった金髪はふわふわと気持ちよさそうに泳いでいた。信者の人かなと思つた成は頷いて、「その……と、友達と見学にきたんですけど、はぐれてしまって、へへ……」と誤魔化していた。

「ご一緒しましょうか……そうだ、もしよろしかったら、私の部屋へ来ませんか？」

女性は、微笑んで成を誘っていた。成はどうしようかと悩みながら「それじゃちょっとだけ……」と承諾しようとした、すると。

「こんな所で何をしておいでです」

階段から降りて突き当たりにあるエレベータから、厳しい声がしていた。成は見てまた驚愕した、ひるみ、一歩後退りをしていた。

すぐさま逃げてしまった方がよかったかもしれない。

(げ)

相手はエレベータからこちらへと直進してきていた。成に関しては降りた時から知っていたように成の前に立ち塞がると、腕を掴み上げていた。「ひっ」乱暴に掴まれて成は血の気が引いていた。

「無事に逃げられたようだ。強運……いや、武器にでも助けられ
たかな？」

男は軽く笑って成を見下していた。……いいえ全然、と成は言っ
てしまったかったが、隙がなく顔を歪めて痛がっていた。

「カツラギ。どうしてそんなことをするの……」

女性は無垢に、そんな素朴なことを言っていた。

「クオリア様。部屋へとお戻り下さい」

両者の会話に成は、あまりにも自然すぎてさらっと聞き逃す所だ
った、目を見開いて女性に怒鳴るように叫んでしまっていた。

「クオリア！」

「クオリア……！」

音が二重に重なっていた。この時に叫んだのは、成だけではな
かったのである。

(え……)

場には、もう一人の来客がいた。見回しても何処にも姿がないと
成が奇妙さに躊躇とまどっていると、やがて天井を破壊し崩れ落ちてきた
石や砂埃のなかから『彼』は着地して出現した。衣服が汚れた真
也だった。

「し……」

次から次へと思ってもみなかった者が待たずに現れて、成は開いた口の閉まる暇がなく渴いてきて過ごしていた。こちらも間を置かず地震が再びに襲ってきていた。「きゃああ！」「クオリア様、ご避難を！」混乱していたなかで、何者でも目を覚ます活の入った大声は真也が出していた。

「クオリアに触るな！」

敵意をむき出しにし圧力をかけた精一杯の攻撃だった。滅多に聞いたことのない真也の核心に触れる声は、成には例えようがないほど悲しいことだった。どうしてそんなにも。成にはいまだに解けない謎だった、そして。

悲しかった。

「クオリア様、おさがり下さい」

「ゲン……」

クオリアの壊れそうで不安気な顔は続いていた。カツラギは、真也を振り払うように手をかき回す、だが、余裕を持って難なくかわした真也は、腰に差して持っていた銃を瞬時に取り出し構えて一発を鮮やかに撃つたのだった。トヒユン、音は風を裂きカツラギの頬をかすめていった……真也が構えていた銃の名は『クオリア』、その名に惚れて金で手に入れた玩具、持つだけで使うつもりはあまりなかった。

カツラギをかすただけのことだったが、クオリアには脅威だった。「ヒ」短く声を上げ肩を竦ませて真っ青になっていた、押し寄せる『何か』にはまだ誰も気がついていなかった。

「クオリア様、部屋へ！」

カツラギがもう一度クオリアを呼んでいた、しかしクオリアは身を震わせて足は動かず、縮こまってカツラギの頬を見つめていた。

「クオリア様！」何度も呼ぶが、クオリアは動かなかつた。「いや……」仕舞いには、抵抗していた。「いやよカツラギ……」カツラギの頬に流れたもの、それは一筋の赤い血液だった。

「クオリア、俺と行こう！ こんな閉鎖的な所から……」

横から真也は手を出してクオリアに……初めて触れていた。「いやああ！」化け物を見たようで思い切り真也を拒絶していた。

「クオ……」

「来ないでえ、怖、い、よおおお！」……

頑なに拒むクオリアに、真也は頭のなかが真っ白になっていた。そしてまた忘れずに地震がきて、立つことが段々と困難になりつつあった。力を持った地震は猛威をふるう、いや本当に地震だけのせいなのか、壁には大きく亀裂が走り、縦揺れは横揺れに、酔う間さえも与えない猛攻撃は始まっていた。大理石で出来た床の一部は割れ、飾りの絵画も割れてオブジェは碎けて粉々に、窓も、天井も、柱も、……人も。通りがかっただけの生物は、狂いねじれて柱に身を打ちつけていた。

成も重い頭痛に悩まされていた。「う、……」耳のなかへ、甲高い音が侵入してきていた、共鳴なのか、説明がつかなかった。この現象に名をつけるとしたなら、クオリアの……

「クオリアの、暴走だろうか。「う、うつつ……」

混乱のなかに駆け込んできた者がいた。

「クオリア！ 何処だ」

「お父様あ！」

天井が崩れてきていた。もう無茶苦茶だった、揺れは酷さを増し、もう立てない、カツラギも、真也も、成も皆……倒れておいて頭を庇い祈るしかなかった。その間に見つけて激しく息を切らしクオリアを迎えに来たのは司祭、クオリアの父親でもある サンタメリアだった。

「おお、可哀そうに、クオリア……」

同情の意を込めて、司祭はクオリアを優しく抱き締め、地震は……止まった。……この始末をひとり、楽しんでいた男がいたことは表に出ることはないのだろう。

(これでいい……)

カツラギの口元は醜く歪んでいた。

混乱は鎮まり、成たちは失いかけた平衡感覚を取り戻そうと傍の物に寄りかかりながら立ち上がっていった。だが正気をどうにか取り戻したと自覚した時には遅く、身の安全が失われつつあった。

「ゲン、お前がついていながらどうしたことが。この騒ぎは」

サンタメリアは憤慨しカツラギを睨んでいた。カツラギは頭を下げて、司祭に謝っていた。

「申し訳ありません、全ては、こいつらのせいでございます」

こいつらと指されたのは真也と成で、カツラギは涼しい顔をしていた。司祭は興奮し、命を下してまた興奮して言った。

「こいつらを捕まえる！ 然るべき処置をとれ！ わかったか！」
怒り狂った司祭とは反対に、カツラギの返事は「わかりました」と冷ややかなものだったという。

地震はクオリアが起こしたものだとは言い難かった。司祭は報告を受けている、サンタメリアの教えに反対するマチサレムという一派が空撃を施設内に仕掛けてきたのだと。見せかけだけで実際は外からの攻撃を防がないシールドを容易く突き破り、攻めてきたのかと思えば旋回して去っていった、こちら側からしてみれば、悪の存在である相手だった

真也は、柱にくくりつけられていた。成は両手を後ろに縛られて、熱湯の入っていた桶を見せつけられていた。平和を脅かす者は罪人、悪で、女であっても許しを請うても罰は与えねばなるまいと、線引きしたがる面があった。カツラギが2人を牢から拷問部屋へと連れ出して、司祭の言っていた然るべき処置とやらを実行に移していた。カツラギにとっては初めてではなく速やかに用意はされていて、拷問のためにとつくられた空間は外界とは完全にシャットアウトされていた。

「お前たちの目的は何だ？　クオリアを連れ出して、……どうする？」

粗末なイスに座ってカツラギは倒れていた成の横に、柄杓を携えて桶を叩いていた。カツ、カツ、カツ……切迫された時を流しているようで、凍りついた空間にはちょうどよく合っていた。

「クオリアを、此処から連れ出す……救い出す」

「救い出すだと？　クオリアが、望んだことだとも？」

「そうだ……」

クオリアも同じ場にいた。そこだけが特注で作られた待遇で、抽象で描かれた布地のソファ、白く汚れない一本足のテーブルがあり、クオリアは楽に姿勢をくずして真也たちを興味深く観察していた。

話を振られてクオリアは、一体何のことやらなのと嘘のつきそうにない顔でしれっとしていた。

「私が？ 何のことかしら。だって私は此処にいるのよ、何処へも行かないし、あなたたちにも会ったことはない、望んでなんかいないわ」

真也には話が違う、とでも言いたげだった。このズレは何なのか、気持ち悪さは拭えなかった。

「ねえカツラギ、ちょうどよくない？ 例のほら、あなたがしている人体実験。あれを試してみたら？ ……」

話の方向は思わぬ所へ転ぶ、サツと翳ったカツラギのなかに、ぬくぬくと育っていた奇怪な熱は、日のめを浴びていた。

「ほお……クオリア様がよければ。……おい、アプリカ！」

カツラギがそう呼んだのは、自動人形^{オートマト}だった。巡回中を他の信者に連れてこられた彼女は球体関節人形で、顔は一眼レフ、皮膚はSOG Siで作られていた。妖艶で美しいとされたが生産を繰り返すうちに機能を優先され、ただの機械人形と評されつつあった。

口のきけないアプリカは信者とともに、言われた任務を遂行する……真也と成を、別室に連れて行くとしたのだった。体温のない自動人形に引きずられて、成はぞっとして抗った。「いやだ、放して！」縛られていた手の紐は解けそうにはなく抵抗しても空回りする、それでも成は諦めずに叫んでいた。

脅しているのかどうなのか悪びれもなく、クオリアは成と真也に『実験』の内容を教えてあげていた。

「実験体になつた人たちが投与された薬物の正体を教えてあげる。」

サイヘヴン、P S Y H E A V E N。脳にある情報量最大限を引き出し幻覚を見せ、能力、超能力を強化、促進させる薬物。夢を見れるんでしょ……最高じゃない？」

クオリアには常識というものがなかった。限度も知らない、自分の価値観だけで物を言っていた。平和にかまけた者の言い、恐怖から逸脱した投げ言葉の数々。責任もなければ始末も考えなかった。

「助けて！ 真也、直人！」

先ほどのカツラギへの報告を思い出していた。『地底民族マダルクキシユの連中、4名のオークション出品登録が完了』、生き残れたのは4名だと言っていた。生、き、残、れ、た、の、は……。成はアブリカにすぎた、助けてほしいと、願っていた。

真也に動きがあった。テレキネシスで紐を解く、自由になった真也の手は、伸ばされていた……

クオリアの方に。

(え……)

表情が無の変わらない真也は、クオリアの名を呼んでいた。「クオリア、行こう！」……何度でも呼びかけるつもりだった。真也は最後まで諦めなかった、粘っていた、例え振り向かれなくても、手をおろさなかった。

成の前でも変わらなかった。

(真……)

成はだらりと手足の力を失くして放り投げていた。扱いやすくな
った成を、信者とアプリカは運んでいった。出て行ってしまつまで
真也は成の方を向いてはくれず、クオリアを求めていた。

（私よりクオリアが……）

成は目の光を失っていた。ガラガラと、足下が崩れていく　し
かしそれは成が見た幻覚だった。

アプリカや信者が群れてきて、真也に集まり襲いかかろうとする
頃には真也はついに諦めて転移^{レポート}し、クオリアとカツラギだけとなつ
た部屋は、静かになっていた。

「さてと……」

カツラギが、今は運ばれいなくなった成を指して言っていた。

「あいつらに見捨てられて、どんな夢を見ているかな、お嬢ちゃん
……何なら、俺がいい夢を見させてやろうか？」

幻覚のなかで、成はカツラギの腕に抱きかかえられ、力を失くし
ていた。クオリアは全く関心を寄せず、「お腹すいたあ」と部屋を
飛び出して行った。

外は雨が降りそうなくらいに暗かった。

施設屋内から脱出した真也は森を外れて、今は使われてなさそうな井戸へと辿り着いていた。井戸は古いが空ではなく、なかに水は溜まっていた。よろよろと足がふらついていた真也は井戸に寄りかかり、休もうとまぶたを閉じかけていると、パキ、と小枝の折れた音がして耳に届いていた。

近づいてくる気配を察知して振り返ると、直人が草臥れて亡霊のように立っていた。

「成はどうしたんだ、真也？ ……合流できなかったのか？」

真也は答えた。

「置いてきた……」

真也は直人に、施設内であったことを説明していった。クオリアのこと、人体実験が行われていたこと、成が連れて行かれたこと…

…聞いていた直人は、真也に問いを投げかけた。

「成を助けに行かないのか、真也？」

真也は答えていた。

「成になんか、興味はない」

直人は最初、聞き間違えたんだと思っていた。

「成なんか、知ったことじゃない……」

2度繰り返し返していた言葉に、直人は腹を立てていた。真也の胸ぐらを掴み起こそうと、叫んでいた。「仲間だろう！」

「仲間……？」

意識が朦朧としているなかで真也は、直人の言い分を聞いていた。

「成は助けを待ってる……俺たちが行かないと、誰が成を助けに行く？ 立て真也、立て、行くんだ！」

真也を目下に、直人は一方的な要求を突きつけていた。目を少しばかり覚ました真也は直人に食ってかかり、直人の痛い所で隠された心中を探るべく口調が荒々しくなっていた。

「なら、どうしてあんたは先に逃げた？ 俺らが捕まって拷問されに連れて行かれた時、俺と始め隠れていたあんたは出ては来なかった、助けにも来なかった。助けたとしてもあんたに、何の利がある？ 金でももらえるのか？ 助けたら」

直人は絶句していた。

何の利があるのかなどと、考えたことがないからだだった。直人は首を振りながら真也に突き返していた。

「逃げたわけではない！ 機会を窺っていただけだ。3人ともに捕まってしまうより、ひとりでも自由に動ければチャンスは生まれるだろう？」

言われても真也には信じられなかった。納得できるまで、とことんと付き合うつもりだった。

「嘘だ。あんたはそう言い訳し『逃げ』ただけだ、あんたに俺たちを助けて得も利もない。下手をすれば、死ぬんだ。それとも何だ？ 危険を冒してまであんたに、何か得るものがあると言っのか……！」

ぐつと喉の奥が詰まり追い込められた直人は……くるりと真也に背を向けていた。これ以上の言い合いは無意味だと、我慢ができなかった。肩を震わせ、核心突かれた心臓は鼓動を早め、……声も震わせていた。

か弱くも、絞り出された声はかろうじて聞こえていた。

「……喜びを得るのだ……」

再度その小さき叫びは、繰り返されていた。「喜びを……」直人は、故郷であるこの土地、アクラムを懐かしく思う。……

惑星アクラム、競争国家であるペリウドキングダムでは、争いが絶えなかった。各個人は尊重され、いつも争っていた。他人は敵で、所有しているものは自分だけのものだった。金さえ払えば手に入るものが圧倒的に多く、他人が幸でも不幸でも、構わなかった。

善し悪しと、勝敗に汚染された国家、何なら罰はコイン、罪の加減はカードで決定しようかと皮肉屋は笑って言っている。

深く眠りにつくことができない国だった。

幼き頃に親に寺へと預けられ鍛えられ、あまりの辛さに耐えられなく宇宙船へと幸運で乗り込み脱出に成功を遂げた直人は、未開で発展が途上のアーノルドで初めて安らぎというものを知ったのだった、そして。そこで暮らす人々の、笑いと安らぎ、コミュニケーション、繋がりというものを知った。これは、……真也が突いたように、得なのだろうか損なのだろうか……？ 腹の底を巡る。

「間違ってるんだ、それが」

直人は淀んでいる雲を見つめ、恐らくは泣き疲れただろう頭のなかを、忙しく回転させて言っていた。

「物ごとを損得や善悪で決めようというのが、間違ってるんだ」

それらはどれも偏りだった 『間違いだ』と決めつけるのもまた、『間違い』だった。

「人はいずれ死ぬ。俺は死に急ぐような生き方は御免だ。急がば回れ、回り道でいい。喜びを見れるなら……見ながら、俺は……」

直人は懐から役に立ちそうもない銃を出して、固く握っていた。顔を上げて真也を見ていた。

「クオリアを……手に入れたいんだろう？ あの、イカレタ女を。好きにするがいい、俺は何と言われようと成を救いに行く」

直人は自分の信念を貫くのに必死だった。言い切ったあとの面持ち、清々しかった。その顔を見た真也はとても驚いて、今にも歩き出そうとする直人に待ったをかけたのだった。「何だ？」

「『シュセンド』は……」

変なことを聞いていた。

「？」「格好……悪いか」

きよとんと、直人は真也にそんな顔をしていた。

「何だ急にそんなことを。どう見られようが別にいいだろう」

真面目な直人、彼は打てば響き、打てば響きの素直さがあった。

「いや……今のあんたが格好いいと思っただけだ。何でか」

言われた直人は、益々、きよとんとしていた。

……

水浴を終えたクオリアは、麗しい髪を撫で上げながら、使いの者にカツラギを訊ねていた。

「先ほどの女性の方と、お戯れの最中でございます」

女中は礼をしてクオリアの背後へと歩を下げていた。クオリアはバスタオルで顔や髪を拭きながら歩いていった。

「なあんだ、遊んであげてるのか。あーあ、退屈。ねえ、お父様はどうしたの」

「明日のオークション結果を前に会合に出席なさるおつもりで、お出かけになられましたよ」

クオリアは舌を打っていた。「ああ、あれ……」
つまらなそうに言葉も選ばず適当に言っていた。

「『ラツカルド』に行ったのね」

「口をお慎み下さいませ」

女中は厳しくクオリアを諫めて、部屋で大人しくするように願っていた。

「そうね。外に漏れたら、面倒」

部屋へとクオリアは戻って行った。

クオリアのひとり部屋は、玩具や装飾で溢れそうだった。見るからに楽しい、見るからに綺麗、見るからに賢そうな、見るからに便利な、物があつた。ほしい物は手に入っていた。

銀の懐中時計は時間を教えてくれ、映像からは民族の音楽が聞こえてきていた。筆記用具は文字を書かせてオルゴールは就寝の合図で流れていて、本は棚で並んで整列を、色褪せれば模様替えをするように言われていた。

目立たない隅には銀の器、金の匙、？燭立てや宝石などアンティーク関連群が無造作に並んでいた。なかでも写真立ては大事にされているのか埃もなく傷み少なく、異彩を放っていたように思われていた。

写真に入れられていたのは女性、クオリアの産みの親、今は亡き婦人だった。上品で、クオリアが成長すればきつとこのような女性になるに違いないと予想される。

「パパ、お金のことばっかりでつままない……」

クオリアの見つめる先には鏡もあつた。自分の顔が映し出されて『つまらない』顔を見ていた。

脳裏をかすめたのは、少年だった、真也だった。自分に手が伸ばされて一緒に行こうクオリア、と誘いを受けていた。ところがクオリアには見覚えがない、あの少年が誰なのか、見当がつかなかった。「あのヒト、誰だったかなあ……」

……

成の帰りを待ち侘びていて、サーカス『カチヨウフウゲツ』の野営テントではクウマが、焚き火の傍で丸太に座りながら膝を抱えつつ小さくなり、淋しそうに尻尾を振っていた。成が去ってから数日が経つが帰ってくる様子もなく、心配だったクウマは毎晩、眠くなって限界が来るまで外で成を待っているのだった。

星々を数えたり、図を作ったり、本でお話を読んだり物語を作ったり。踊りを踊ってみたりなど、ひとり遊びが上手くなっていった。

「またそこで成を待っているのか、クウマ？」

テントのなかから顔を出していたのは仲間のダンだった。一番の黒髪で、男らしく頼りになるしっかり者だった。「うん……」「そうか……」

荒野の庭では、サバンの土地でよく見られる野生動物が転々として生態系を崩さずに過ごしていた。地平まで見渡せたクウマは、はつきりとは暗くて見えないが夫婦仲良く寝ているらしい動物を飽

きずに見ていた。

「捕って食われたりしてな」

「やめてよダン兄ちゃん。意地悪だなあ。あれは夫婦だから、敵じゃないよ、レンアイさ」

「成は女の子じゃないって知ってたか」

「ええ？」

ダンはクウマの隣に座り、クウマの反応を見て楽しんでいた。

「男でもないけど」

「それってどういう」

「実は俺にも成にも解っていない。でも成が、自分で自分のことを言ったんだ。姿は変えられるから、と。だからきつとだ、もし肉体が……体がなくなってしまっても、姿を変えて、成の意識はこちらへ帰ってくる。成の帰る場所は、此処でしかないんだから」

「……そうだね」

流れた星がひとつ。追いかけて、もうひとつ。

ダンの胸元には、円の中央に十字が描かれたマークの刺青があった。信者は、増え続ける。安らぎを求めて……。

……

ラッカルドでは、本会議が行われようとしていた。決して表面には出ることのない談合だった。黒のハイパースーツや黒衣、黒光りに纏った者がIDパスで集まっていた。会議の予定決定したのは数日前とかなりの緊急だったが、皆はラッカルドの機密性質上、仕方ないことだと容認していた。

開かれる予定地も前日告知と慌ただしい。しかし今回、会議の要

ともなる人物は、欠席とのことだった。主宰を訊ねた参加者に、代理の女性が回答していた。

「竹刀様は本日、ご急用のためご欠席です。何か緊急がございましたら、わたくしが……」

代理が言い終える前に年輩の質問者は口を出していた。

「何と。では、本日集まったのには意味がないではないか」

代理は小さく折りたたんでいた書類を広げると、質問者の前で読み上げていった。

「言伝ことづてです。『サンタ、お前に委ねる』と」

たった一文だけのメッセージに、質問者は頭を抱えてしまっていた。「何ということか……全く」

久しぶりの再会だとの喜びも打ちひしがれて、大司祭サンタメリアは元気を失くしてしまいやる気さえ消えかけていた。すると代理の女性がサンタメリアを引きとめていた。

「もし可能なら、と」「竹刀がか?」「もし可能なら叶えてやってほしいと、別件がございまして言伝を預かっております」「私にか? 珍しい」

代理とのやり取りは、まだ続いていた。

「『弟がどうやらお邪魔しているようなので、助けてやってほしい』と」

サンタメリアは首を激しく傾けていた。「……“弟”?」

「『今、そっちに俺も向かっている』と」

「何い!？」

アーノルド暦93年4月某日。ラツカルドにて午後3時より本会議開始。

……

悪夢を見続けていた成は、薄ぼんやりとした視界を受け入れて
っていた。

「……此処は……」

見たこともない聞いたこともない、機器の並ぶ無機質な空間だっ
た。工作機械^{マシニングセンタ}、輸送機械、生物機械が並び、壁には設計図が隙間へ
と上から上からと貼られて、その前には自動人形や信者が数名、待
機していた。成が寝かされていたのは中央より若干窓寄りの黒いベ
ッドの上で、傍らには解剖器具、スコープビジョン、心電図、酸化
還元装置など、成は機械に囲まれていたのだった。床やベッドの上
には、白の粉末や水滴が落ちていて成を不思議がらせていた。

「クレイスム・プルーダ、カモタ・ハツプニカ」

体を起こす力が起きない成に、頭上で意味の解らない言語が聞こ
えた、声をかけたのはカツラギだった。

「こんにちは、“実験室”へようこそ、って言ったのさ」

それが何を意味するのか。成は寝ていた時のことは、一切覚えて
はいなかった。

18時間ト47分が経過スル。

……

真也と直人、2人は施設内の森で息を潜めて、お互いの情報を交換し談義したあと、成の奪還を目標に侵入を決行した。真也はクオリアを連れ出したがっていたが、あのクオリアの様子では困難だと頭の片隅に置いておくことにしていた。

再出発し、迷いながらも先に覚えていた通路と互いに交換した情報によって、割と時間を短縮できたのではないかと判断できよう。道行く途中、アユリカと出くわしていた。

「？ 何だ？」

直人が行きかけたのを数歩バツクすると、後方の曲がり角に隠れてじー、と直人たちの侵入を見つめているアユリカが1機いた。だが、じー、と見ているだけで、特別何もしてはこないようだった。疑問に思った直人だったが、まあいい、害はないだろうと先を急いで行った、すると。

前方に現れたのは自動人形「アプリカ」、顔面部分に備えつけられていた一眼レフが、2人を捉えていた。そしてしなやかに間接を精巧に曲げて、両腕が上がっていった。

言葉は発しないが、口に似せた穴は言葉を発音しようとしているようだった。口唇を読めば、こう言っていた。

あやしい はっけん

…… 敵意があった、それは言葉が理解できずとも空気で十分に読むことができている。

上がった両腕の先には、手首を取って空洞ができていた。おおよそ見当がつくが、この穴からミサイルが飛んでくるに違いなかった。

「伏せる、真也！」

前方ばかりを見ていた真也に背後から押し覆い被さる直人だったが、伏せた上に砲弾が直進で飛んできて、それは……。

アプリカに当たったのだった。砲弾を放ったのは、アプリカではなく、アユリカの方だった。

「ガ……ガガ……ガ……」

砲弾の命中したアプリカは、破壊されてしまった。大きく窪んだ胸は全身のバランスを崩して滅びるしかなかった、かつて芸術と呼ばれたほどの精巧、緻密さを求められて君臨していた機械仕掛けの人形は、脆くも玉砕して時の終焉を迎えるに至っていた。

何故、機械が機械を、と、直人はアユリカに注目していた。アユリカは恥ずかしがっているのか、曲がり角の陰にいて出てこようとはしなかった。

「……ありがとう」

直人が礼を言っておくと、球体の触手が伸びて手を振っていた。言葉は通じていた。

直人たちが去ったあと、アプリカの残骸を前にしてアユリカは、こんなことを思っていた。

ホロベ アプリカ。

機械の世界にも、権力交代の時期が近づいていた。

施設内はどうやら、迷いやすく複雑に通路を成しているようだった。此処は要塞か、地下か何処かに戦闘機の1機ぐらい隠し持っていて不思議ではなかった。真也と直人は、一度敷地内の外に出た時に通ってきた通路や機関部屋など覚えてきた範囲で想像上の地図を作っていた。一致しない部分も数多く見られるが、互いの一致部分は確実だと思い込みながらの作業だった。

一度描き起こすと、あとは記憶するだけだった。地図は地図、見ながら持つて歩けるほど安全だとは言えなかった。油断すれば、さっきのアリカVSアプリカ戦みたくいつ砲弾が飛んできてアウトになるか予想ができなかった。

「成は何処にいるんだ……くそ」

直人は苛立ちながら、手がかりを探していた。

(クオリアは……)

真也は、望みも抱いていた。2人の目的が、ズレていた。

一方、実験室に隣接し『制御室』と呼ばれた部屋にカツラギはいた。実験室よりもさらに機械が所狭しと並列に熱気や冷気を吐き出しながら作動していた。薬品に漬けられて保存されていた生物も奥の冷暗庫に一定の温度で保管されていた。此処には血ではなく電気が流れていた。

カツラギは言っていた……「性懲りもなく来た御褒美とでも。お望み通り、2人に会わせてやろうじゃないか……ふふ」。カツラギ

につく信者は、カツラギの指示を待っていた。確固の意思を持つていたはずだが、彼らに疑問は生じてはいなかった。これが「服従」^{マインド・コントロール}で、“精神操作”、規模の違いはあれどあくまでも自然に、気がつかれずに生活のなかへと浸透していくものだった。メディアの大見出しに反応し、踊らされていくように……。

「落とせ」

冷笑のひと声は実行されていった。

カツラギの指示により、真也と直人は足場を突如にして失い、成の時のように真つ逆さまに落ちていった。ただ、2人はほぼ同時に落ちていったが、それぞれ別々の場所に落とされていていた。

……

どちらも部屋のなかの構造は同じ、壁にはパイプ、銅管、メータなどが通い、隅にはタンクやコンテナが積んであった。窓はない、地下だから、人がいない、滅多に人が来ないほど深いからだった。

落とされて着地は2人ともできていた。直人には丈夫な体が、真也には遠隔操作能力が備わっている。2人とも別れてしまったが、カツラギの計らいで会うことができた、だが。

直人の前にはクオリアが。

真也の前には成が、現れていた。

「再来。あなたが今日は相手をしてくれるの？」「遊ぶ？」

「だって、あなた此処に来たんだもの……私の遊び場」

遊び場だと言ったクオリアは、直人を気に入ったのか無邪気に振

る舞い、心底楽しそうに胸が躍っていた。クオリアは閉じこもってばかりではない、敷地内だが信者とも交流をしているのだろう、血を見たただけであんなに怖がっていたクオリアが、人を全く怖がらないというのも変な話である。

真也の思い描いていた美の象徴のようなクオリア像とはかけ離れていく安っぽい実像のクオリアに、直人は一体どうなってんだと悩みを増やしていった。真也が嘘をついているとも思えなかった。では何故これらは食い違うのか。それは、それは、クオリアとは死に直面する真也にとってあくまでもすがる唯一の……

直人は、鉄のにおいが鼻につくなと気がつき注意が逸れていた。さらにツンとする刺激臭も混じっていた。

「動かないと体がなまるの……食事は済ませてあるから、いい運動しようね」

クオリアは言いながら笑いながら崩しながら……変貌スル。

……

直人が一生懸命になって探してくれていた成に、真也は会うことができた。勿論、嬉しいことだが真也の表面に出ることはなかった。代わりに成が真也に『喜び』を表現していた。

「来てくれたのね、真也」「ああ……」

「嬉しい！ もう会えないんだと思ってたんだもの」

再会した成は真也が知っているお調子者の成そのまま、何を大げさだと真也は馬鹿みたく思っていた。「だってさ〜見てよ、ほらあ……」

ほらあ、と苦い顔の成は真也の至近で自分の足先を見るように勧めていた。足が何だと真也は視線を下げて見てぎくりと凍りついた。「……が」言葉を忘れてしまった。……成の足は。

みるみるうちに太ももの付け根あたりからひげ根の根が生えてきたようである。足の原型は何処だと無残にもなくなっていく、ねつちよりとぬめりをも伴ったこれではまるで……下等生物、軟体生物、植物人間。見たことも聞いたこともなく正確に例える物が見当たらず形容説明に困り、真也は全身に稲光を浴びたように衝撃を受けて固まり次に焦っていた。

「私、もう、成じゃないの。兵器、なの……」
真也には、成の言っている意味が無情でも解らなかった。

クオリアと成、2人はそれぞれ姿を変えていつていた、体から根を伸ばし床へとこぼれて張り、さらに衣服を破いて手の代わりに触手が生えて、かろうじて人間、かろうじて意識は残されていたと思われる、マバタキが繰り返されていた。だがそれはどう見てもヒトから離れて『生物』、作用の発端は遺伝子をいじられたのか薬物を投与されたためかそれとも別種との融合による結果なのか？ とうとう　ともかくも解るのは2人ともか成だけか、カツラギによって成の言う“兵器”の段階へと向けて実験体にされたことで、まだ段階、開発途上、制御機能は発明されてはいない　これは大いなる脅威だった、誰が責任をとればいいのか、議論は熱中するだろう、結末が見えていない。

身体が勝手に暴走している、クオリアも成も。指令を出す脳までにと根を張るのも時間の問題だった。生物は進化してしまうだろう、細胞は餌を求めて食い散らかし増殖するのだろう、コピーを作り、終わらせようとは考えていない、目的を持たずか、支配が目的かは

解らなかつた。

真也は手段が全然と思いつかなかつた。成の触手に絡まれまいと逃げ、逃げてもやがては息切れ、頼れるはずのテレキネシスは命中を外し効率が悪く足ももつれて転んでしまった。もしテレキネシスによつて命中した所で弾丸は成を貫けない、すんで止まるだろう、何故なら目標物が『成だから』。真也の何もかもを狂わせていた。どうしていいのかが、解らなかつた。見れば

これは成ではない。

(シンヤ、タスケテ……)

そういえばいつも悲鳴は聞いたことがなかつた。殺す時は、いつも聞けない距離からで。

(シンヤ、タスケテ……)

でも悲鳴の声は知っていた。おかしいだろう、では一体、誰の声だったのか？ いつも沈み悲鳴を上げていたのは。慰みのクオリアを描いていたのは。正当化していたのは。

(アナタノ心ガ欲シカッタ……)

あれは真也、自分の。

気が狂れたかに見えた真也は銃を構えていた。使えない玩具だと踏んでいた銃は『シャープペンシル鉛筆型「SPE型」』で、針が飛び出す。だがこちらに来る前に予め猛毒を弾となる針に塗っておいたため、刺されるとその毒に侵されて死ぬ羽目になるのだった。即効性だが、個体によるだろう。

成の意識は次第に真也に入り込み、真也を苦しめて真也は堪らなく束縛からの解放を願った、生きるために、そんな理由のために成を犠牲にしてもやらねばならない、真也は常のように必死に言い訳を暗中から手探りで探して掴みかけて放して掴んで見つけようと

もがいて

成を下に押し倒し、幾十となって生えた『足』たちの気色の悪い波に絡まれながらも真也は銃を成の心臓に押し当てて引き金を容易く引いてそして。

ついに、針は成を刺していた。「うがああ……あ……！」成の触手はぴたりと動きを停止してしまった。

真也の全身に針が刺さったような錯覚を覚えていた。だが苦しみからは解放されていくはずで、もう終わりだ、終わりなんだこれで、終わりなんだ、もう　喘ぎは、天上に向かってている。

生きていたくないと、真也は願っていた。

……

カツラギは出来上がった実験結果を前に、思考を巡らせていた。

「ふうん……」

制御室には幾つかのディスプレイが設置され、それを通じて部屋の監視をしていたが、カツラギは成にもクオリアにもさして成功だとは思えなかった。自分が思っていた結果とは、差異がありすぎたためだった。

「こんなものか、人の意志とは……滑稽兵器としか、思えない」

カツラギはそのような評価を下し、映っていたディスプレイの電源を順に切っていった。だが、映像を観ながら研究結果と睨み合いをしているうちに、カツラギは『訪問者』の気配を感じることができず、進入を許してしまったようだった。影が　背後に男が大人しく、立っていた。

ライフルの銃口をカツラギの背中につけていた。かちゃ。その音にカツラギは振り向くことすらできないで両手を万歳とゆっくり……

…掲げていった。

「お守りご苦労だったな、カツラギ。 主人の留守中に」

オリーブグリーンロングコートを着た貫録のある若い男は、ド
ンツ、と一発、返答待たずにカツラギの背中を撃ち抜いていた。実
験結果の書かれた紙と、カツラギの体は地面へと沈んでいった。こ
のコートの男が現れるまでは信者も機械もカツラギの支配下天国だ
ったが、長いものには巻かれて、服従の相手は変わるものである。
ドクドクと体温の残る血液は流れ、カツラギは信者たちや男に見取
られて、囲まれて息を引き取っていった。実にあっけなく幕は閉じ
られたのだった。

「竹刀様……」

信者のひとり、体線の細い男がコートの男の名前を呼んでいた。
他の信者たちも状況に落ち着かずにはざわざわと騒ぎ出していった。

「ロコミも、たまには役に立つ。少し行動が外部に漏れたようだっ
たな、カツラギ」

おろおろと女性が2、3人で固まって震えていた。「サンタメリ
ア様は……？」そう尋ねる。

ライフルを腰に片付けて、コートに隠した竹刀という男は、くる
くるとした自分の巻き毛を指で遊びながら「んー？ サンタかあ？」
と適当加減さで答えていた。

「今こつちに帰って来てるんだらうよ。安心しな、ご主人様はぴん
ぴかぴんと無事だから。クーデターはホレ、未然に防げたみたいだ
し」

竹刀は言つと、コートの裾を翻して「後始末よろしく」と軽く言い残し制御室を出て行った。出るとすぐに、竹刀は下方でもたついていたアユリカに下半身をぶつけてしまっていた。「おっとすまんおー、アユリカ、お疲れさん。お前たちがしつかりと見守ってくれてるから、こつちも助かつてるぜ」

につこりと笑いかけながら竹刀はしゃがみ、アユリカの頭上をよしよしと撫でていた。

「さてと……」

重い腰を上げて、向かう所へと、髪を掻きながら歩いて行った。

……

情報は、与えるものではない。または、与えられるものではない。情報は、使うものであると記す。己左右おのれされずへ。

金と同じだ。使うべきにして使うものだった。使われるなど。

……

クオリアに『遊ばれ』ていた直人は、服がぼろぼろになっていた。

「キヤハハハハハ。どこどこ破けー」

直人は丈夫な体のおかげでクオリアからの攻撃には耐え得るが、服の方は耐えてはくれなかった、もうダメだ服は勿体ないが諦めようと直人は馬乗りになった姫、もといクオリアからの解放を願っていた。完全に『遊ばれ』ていた。

「何やってんだおま」

間の抜けた声が入りから聞こえてきていた。竹刀、その男。回りにはキヤーキヤーと歓声を上げているヤオパ族をつき従えていた。ヤオパ内ではアイドル扱いだった。

「兄貴！」

「よう。修行から尻尾巻いて逃げだした我が弟、何してる。クオリアの奴隷か？」

あまり笑えなかった直人だったが、安心感を得たようで、顔がほころびていた。

「お兄様なの？ 孫竹刀……しなーい！ お帰りなさあーい！」

クオリアは直人に跨って乗ったまま元気に手を振っていた。

「おおクオリア、元気そうだな。それはそうと、お前の下にいる直人はそんなへっぴこでも大事な俺の弟なんだ。放してやってくれ」

「はあーい」

気持ちのよい返事をして触手を絡めとり『片付け』たクオリアは、疲れたと言って部屋へと戻ってしまおうとしていた。それを制して竹刀は医療室へ行くようにとクオリアに言いつけていた。

「えー」

「えー、じゃないの。俺らの留守中、カツラギサンに何かされてないか検査しとけい」

クオリアは面倒くさーい、と触手をぶらつかせて文句を言っていた。

直人と竹刀、2人はともに並んで歩き、久々に会ったと話に花が咲いていた。昔に遊んだ記憶しか残っていないが、懐かしさと嬉しさで積もりに積もり、直人は溢れそうでいっぱいになっていた。

「皆、元気か？」

アクリラムを捨てた直人にとっては、帰り辛さがあつた、理由がないと帰れないと思っていた。2人は垂直エレベータに乗りながら、地下へと降りていった。

「元気さ。佐瀬流がまた恋愛トラブル起こして家が爆破されたけど、虚空兄貴が金で解決してくれた。あー、金は便利」

「おい……」

竹刀の近況話は何処で突っ込んでいいのか悩まなくていい所でまた直人は悩んでいた。そんな風にふざけていたのか本気だったのかは本心不明だが、竹刀は直人に直入に聞いていた。

「この国の……この星の未来を、どう思うか直人」

……少しの間を置いて、直人は真面目だが嘲笑い答えて言った。

「腐った連中だ……争いが絶えない、いつも何処かで争いごとが起きているんだろ性懲りもなく。私利私欲に走りやがる、反吐が出る

……」

竹刀は、はは、と笑い、「一側面だ」と付け加えておいていた。

大司祭サンタメリアと孫竹刀は一度、意気統合をしていた。

この宇宙の政権を手に入れようと考えている、と言う。

「政、権、だと……？」「この宇宙を動かす見えぬ神は、何だと思っ直人」

「見えぬ神……？」

いきなり壮大だぞと直人は言い返せずに詰まっていた。竹刀はまあ分からないさと肩を叩いていた。

エレベータは階ごとに停まっていた。乗り降りする者がいるたびに、話は沈黙を挟んで進んでいた。竹刀は見えぬ神はラツカルドだと言っていた。直人は後ずさり驚嘆していた。

「ラツカルドが！？ そんなバカな、奴らは……ただの金儲けじゃないか」

直人が大声で反論した時には、2人以外にエレベータは無人大った。しばらくの間の長い沈黙は、竹刀が打破してくれていた。

「奴らは金で、宇宙を買ったのさ」

嫌な汗を直人は流している。「この宇宙は……」「奴らが神なんだ 変える」

竹刀の目は、腐ってはいなかった。

エレベータを降りて、直人と竹刀の2人が行き着いた所に真也と成がいた。しなくてもいい戦闘を『させられ』たのか成は、真也を襲い、脳から意思は遠ざかっていっただろう。真也が放った針の弾丸は成の心臓に当たり刺し、猛毒で汚染された成は真也の腕のなかで

願われた幸せを夢見ているのかもしれない。

「どうした真也、成は……」

駆けて近寄ってきた直人に、真也は何の受け答えもしなかった。

銅像のように成を抱きかかえて座っていて、だらんと体を真也に預けて意識を失っている成に 目を離さなかった。

「成が……」

固まった頭と体のまま、真也は思ったことを言っていた。

「あたたかくないんだ……」

真也は成に抱きつかれた時の温もりを懐かしいと、思い出していた。

「成が冷たい……」成は下半身だけを根のまま、成の原型は保たれたまま息をしていなかった。

真也からは涙ではなく、汗がひとしずく、……流れていた。

真也と成は、施設内にある医療ルームへと運ばれて行った。そして2人ともは、治療と検査を受けることになっていった。

……

カツラギの『戯れ』のせいで生物兵器へと変貌しかけた成は、運ばれてすぐの懸命な処置により息を吹き返すことに成功をしたものの、生命の危機は消えたわけではなかった。医療スタッフや医者が全力で成の治療にあたり、集中体制で休まず監視をしていたが。

「今夜が峠でしょう……」

宣告は、真也に再びの混乱を与えていた。

真也は集中治療室からは遠く、腰かけていた。ガラスの窓越しに管の付けられていた成が見えて、予断の許さない状況を長くじっと見守っているしか方法がなかった。ああなってしまったのは自分が撃った猛毒の針のせいと、それから……自己弁護していた。

（仕方なかったんだろ。ああしなきゃ自分が危なかった。成がどうなるうが、知ったことじゃないじゃないか。俺にはクオリアがいてくれれば、それだけで充分だ、そうだろ）

ああなったのは自分のせいなんだという自分、いや、自分は悪くないという自分がいた。

対話して、両者は席を譲ろうとはしていない。続いていった。

（果たしてそうなのかな？ なら、何故此処にいるんだ。此処にいたって成が回復するってのか？）

足は動かなかった。

（『動けない』のか、『動かない』のか。……全然違うけど）

……

「動かない、だ……」

真也は、初めて涙を流していた。そして言う、意思を示している。「俺は今、自分の意思で此処にいる。決して囚われているわけではない」そう言い切った。言い切ると、胸の痞えは和らいでいった。

成が笑ってくれたなら。

直人が言っていた、『喜びが見えるなら』……回り道もよからうと。何故生きる理由を求めていたのだろうと、真也は新たな疑問にぶつかっていった。生きるために人を殺していたのに、何故生きているのかなどという問いかけは、真也の閉ざされた墮落世界からの脱出だったのかもしれない。生み出された新たな壁の前に真也は、懺悔した。

「ごめん、成……」

謝って許されようでも、成が意識を取り戻さなければ許しはしてくれないだろう。許しを請えない真也が極限にまで追い込まれた、その時だった。

真也のなかに、クオリアでもない、別の者の声が真也の名を呼んでいた。まさかと思い、真也は意識を集中して声の主と、目を閉じて、まぶたの裏に投影を作り出していた。主は直ちに見つかる、真

也が期待していた通りだった。

「成？」

声に出して真也は聞いていた、直人は竹刀と何処かへ行ってしまつて、あとは医療関係者が時折通りすぎるだけで、真也の声は外には漏れていなかった。心おきなく真也は集中できていた。

小さく聞こえていたか細い声の主は、しっかりと真也に届くようになった。

（「おはよう、真也……大丈夫、私、生きてるよ」）

真也の安堵した声は感情を混ぜていた。

「本当か？」

（「うん。でもさ、体が動かせない。まだ起きれるまで力がないんだ」）

「そうか……一体、いつになるんだろうな」

（「判らない。100年後かも」）

「おい……」

（「ふふふ」）

他愛もない会話は続いていた。

「これって、テレパシーなんだよな。クオリア以外に実践できたのつて、初めてでよく解っていない」

（「ああ、それで初めて会った時にテレパシーとかも少々ならつて言つてたんだ？」）

「充分に使いこなせるのはテレキネシスくらいだ、クオリアに教えてもらつた使い方……」

（「あのさ」）

「ん？」

（「真也が思ってたクオリアと、私も見たクオリアって、同一なの？ 私には……」）

成との対話は数時間にも及んでいた。だが苦痛ではない、成の言葉は音楽を聴くようで心地よいものだった。真也には今までになかった時間だった。シュセンドは時間を奪われてしまうのだろうか、謎である。

（「ねえ、真也……あなたのなかにまだクオリアは、いるの？」）
主の、首を傾げるさまが想像できていた。

「……ああ、ずっと一緒だ……」
（「それでいいのかなあ」）
「何だよ」

（「クオリアなんてただの子どもじゃない。外の世界を知らない、純粋な子ども……仮にあなたに呼びかけたとしても、外に出たいがためにあなたを利用しようとしているだけで、クオリアにとって、あなたはたったそれだけの価値」）
「……」

塞ぎ込んだ空気を、主は呼び戻していた。

（「「シュセンド」、金稼ぎの下僕。私はあなたを助けてみせたかった。光ある所で芸を見せるのは、楽しいことだよって、教えてあげたかった」）

「……」
（「喜びを与えて、報酬がもらえた。素敵じゃない？」）
「……成」

（「ん？」）
「シュセンドって、格好悪い……か？」

（「……」）

主は10秒間沈黙だったあと、答えを出していた。

（「わかんないや」）

……

成は時代が移り変わっても、眠り続けていた。

アクラムでの滞在許可をとり此処での生活をスタートした真也はまだ、“シュセンド”として働いていた。だがそれは裏稼業で、シュセンドと、普通の労働生活をしていた。金稼ぎの目的は、ひとつ増えていた。

成の入院費と、治療代だった。

真也は次の獲物ターゲットを狙いながら、成の帰りを待っていた。

しかしそれは、遠い未来の話……。

大司祭サンタメリアと孫竹刀の政権交代の『準備』は、着々と進められていた。生物兵器の開発、それから入信者の拡大。ネオカリントリンという菌種を体内で育てることにより、一種の『爆弾』をつくり出す、その入れ物となったクオリア。千年後の彼女は、大宇宙オークションに出品されるらしい、と、真也の僅かながらに芽生え始めるだろう未来予知プレコグニションはそう予測していた。

テロは、間もなく実行される。そしてそれは、近い未来の話……。

……

此処にひとりの『シュセンド』がいた。彼は精神操作マインド・コントロールされて『クオリア』の下僕だった。でも、もうそれは過去となりつつあるのだろつ。

少年「シュセンド」は、『人間』となる。

《END》

シュゼンド・15（後書き）

微妙な話をご読了頂き、ありがとうございました（ペコリ）。

この作品は、空想科学祭2009の参加作品です。企画後、修正や微調整を行っています。今作品に關しましてはブログ（記事URL：<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-170.html>）にて。イメージや挿絵のイラスト、後書きなど、話に印象を過度に与えるおそれのあるものは掲載が主にそちらです。

そいでは、また何処かでお会いいたしましょう

あゆみかん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1187i/>

シュセンド

2010年10月10日12時39分発行